

第3回RYLAセミナー報告



TAKE TIME TO SERVE

も く じ

発刊によせて

無形の感銘をいつまでも	近 藤 良 一	1
地域社会の青少年に真の働きを期待して	今 井 鎮 雄	3
セミナースケジュール		5
講 演 I		
人間と役割 — 青年期の意義 —	田 中 国 夫	7
社会と青少年	増 田 光 吉	17
国際理解	新 野 幸次郎	25
講 演 II		
経験を語る	鳥 羽 芳 機	33
バズセッションより		38
参加者感想文		45
参加者名簿		100
あとがき	深 川 純 一	104

じょうよ

発刊によせて



人と出あい
神と交わり
愛の火の
もえるところ

無形の感銘をいつまでも



R.I 第 267 地区ガバナー

近 藤 良 一

瀬戸内海の大自然につつまれた青年達の清らかな心と心との交流、第三回余島ライラに参加した感動はいつまでも鮮烈である。

1959年オーストラリアの第260区ブリスベインではじめられたライラ・セミナーはオーストラリアで成功したので、ニュージーランド・米国・フランスでも行われるようになり、日本では1976年はじめて行われた。

余島ライラは、1979年第268地区主催第267地区共催ではじめられ、1980年につづき今回は第三回目である。「唐様で書く三代目」と古川柳にあるが、第三回余島ライラは益々盛大に実りゆたかなものと発展している姿はありがたい限りである。

余島ライラのユニークなことをあげれば、先づ桜の綻び初める四月はじめの瀬戸内海国立公園の小さな島を借り切って行われるということ。百千鳥（もちどり）の歌声 松籟、浪の響き。春まさに開かんとする小島で人生の春の若人が集い語らい、いろいろのことにつき思索し、講義をきき、時に歌い踊り興ずる。

次に鍵をかけない、現実に宿舎や部屋に鍵をかけず 心と心が打ちとけるセミナーに打ちこめるということ。この時点、神戸Y M C A 野外活動センター施設は、ライラにのみ提供開放される。つまりこの期間、余島はライラに参加した人達だけの世界である。余島の林の中のキャビンと称する宿舎に分宿するがすべて鍵なしである。それで何も起らない。ニューヨークのホテルに泊ると、

ノックされても扉はドアチェーンをかけたまま細目にあげ相手をたしかめねば危険であると云われたが、何という大きな差であろう。鍵をしない 警戒心の不用な 心と心のふれあう青年の語らい 四日間の寝食を共にするセミナーは受講者に、青年のエネルギー、情熱、創造力をかきたて、大きな無形の感銘の影をおとし得るものと、益々の発展を祈って止まない。



地域社会の青少年に真の働きを期待して



R.I 第 268 地区ガバナー

今 井 鎮 雄

本年でR.I 第 267 地区・268 地区合同のライラセミナーは3年を経過したことになる。毎年参加者諸君に大きな感銘を与え、またクラブの皆様からもよい集会であったとご好評をいただいていることはたいへん嬉しいことである。

ライラはその発祥の地においても、またその後各地で開催されるようになってからも対象をおおよそ高校生から大学生の若い世代に置いていることは周知のとおりであるが私どもの地区においてはこの対象を特に20歳以上のグループ指導の経験を持つ者に限ったことが一つの特徴といえよう。これは青少年の仲間としての指導者より、青少年の団体の指導者を養成することが現在必要であると考えためである。仲間としての指導者の養成は行政ならびに各青少年団体も力を入れているので、ロータリーは少し角度を変えてどのような団体の指導者にも役立つようなセミナーを目指したのである。

今回セミナーを通して深く印象に残るのは第一はそれぞれの分野での優れた先生方にご講演をいただいたことである。「世界理解」、「社会理解」、「人間理解」について各先生方から適切など教示をいただけたことを感謝したいと思う。第二はロータリアンとの交りである。地域への奉仕団体であるロータリーのメンバーの一人一人の情熱が若い人々を刺激し、あらたなロータリーの若い新派が生まれたことも生活をともにして下さったロータリアンの身をもっての奉仕の結果であることを思いお礼を申し上げたい。第三は参加した青年諸君の素晴らしさである。新しい時代に対する洞察、社会に対する責任感、そして

仲間とともに新しい青少年を育てようとする情熱、これらの自乗作用が素晴らしい効果を生み出したことは参加者の感想にも現われている。

さてライラの目的は講習会ではなく、そこからさらに地域社会へ真の青少年の働きが生まれることである。ライラに参加した若い指導者の諸君が地域にあるロータリークラブと力を合わせて地域の青少年問題に取り組み、大きな運動に盛り上げることを心から願っている。

組 織 共 会



<セミナースケジュール>

	4月3日	4月4日	4月5日	4月6日
8				
9		朝 食	朝 食	朝 食
10		講 演 「青少年理解」 田中国夫氏	講 演 「社会と青少年」 増田光吉氏	講 演 「国際理解」 新野幸次郎氏
11				
12		昼 食	昼 食	昼 食
1		少年キャンプ見学	バズのテーマリマインド	記念植樹
2		体験談 鳥羽芳機氏	思索の時間	— 離 島 —
3		レクリエーション	バズセッション	
4	オリエンテーション ライラとロータリー バズのテーマに ついて	(ヨット・テニス他)	(キャビンごとに)	
5				
6		夕 食	夕 食	
7	夕 食 (オープニング パーティー)	自由時間	自由時間	
8		キャンプファイヤー 親睦の夕		
9	キャビン タイム	(ディスコタイム)	フォーラム	
10				

<バーエジでズーサミナ>

1月3日	1月2日	1月1日	1月2日
講演	講演 I	講演	
10 11	10 11	10 11	
12 13	12 13	12 13	
14 15	14 15	14 15	
16 17	16 17	16 17	
			
18 19	18 19	18 19	
20 21	20 21	20 21	
22 23	22 23	22 23	
24 25	24 25	24 25	
26 27	26 27	26 27	
28 29	28 29	28 29	
30 31	30 31	30 31	

人間と役割

— 青年期の意義 —



関西学院大学社会学部教授

田 中 国 夫

まず一番始めにどんな話をしようかと考えているかと申しますと、平凡すぎるかもしれませんが、人生に於ける青年期というテーマでお話ししてみようかと思えます。まずご紹介するのが、神戸新聞という兵庫県の有力な地方新聞の論説委員をしていられ、現在は神戸の青年文化研究所の所長ですが、梶さんという面白い方がおられます。その方が神戸市消防局から出している「雪」という誌記に人間のライフヒストリー（人間の一生）を文字で作られたものを書いておられ、それが大変面白いと思えますので、ご本人の許可を得てみなさんにおすそわけしたいと思えます。この際人間と申しましても女性の一生であるわけですが、

「好、娘、嫁、妊、嬢、姑、婆、妖」
一番左から文字が並んでゆきますが、女の子……女の子の時期があるわけで、女の子と書いて何故が好きと読むわけですか。これ不思議な文字とお思いになりませんか。文字というのは男が作ったに違いないと考えさせられます。女の子の段階から今度は良い女、これは娘になるわけです。娘さんから家がつきましてお嫁に行かれてお嫁さんになるわけです。そのうちに妊娠されて子どもさんが生まれるわけです。最近はお子さんの数が少ないですが、昔は澤山生まれて、始めははじらいを含んだしおらしいお嫁さんであったのが、子どもが1人、2人と増えるうちに、デンと家の中に納まって旦那をアゴで使うことに

なってきました。こうなると旦那の方も難儀な嫁さんということで鼻についてくるわけでありませぬ。女ヘンに鼻と書いて嬬と読みませぬ。これもおもしろい字と思われませぬか。見れば見るほど味わい深い、私はこの字大好きであります。嬬の下に天下をつけて嬬天下なんて言葉もありますが本当にどっしりと落ち着かれて、娘さんが24～5、息子さんが25～6ということになってきますと、嫁に行かれたり、嫁さんをもられれたりします。そうなりますと、今度は嬬からいよいよ古びて参りまして姑さんになります。女ヘンに古いと書きます。姑さんに更に年季が入ってまいりますと、顔に波がうって参りまして婆さんという。顔というか上半身が波うってくるわけです。それから更に年季が入ってまいりますと妖怪変化、おばけ、お亡くなりになってばけて出てこられるわけです。

今、皆さんはこれ位（娘）のところを通過中でありまして、新幹線に乗りまして、東京から沼津あたりを通過中といったところですよ。男の人は自分には関係ないという顔をしておられますが実は大変関係があるわけですよ。女の人のこの変化と共に、旦那は苦しめられたりいろいろでそれはたいへんですよ。今、みなさんは非常にはなやかであるわけですが、いずれこゝ（婆）にいくわけでありまして、それも割と早いとこ来るわけですよ。

例えば24才で結婚して、25才で0才の子どもが出てくるとします。10年たったら35才でしょう。もう10年たちましたら45才で子どもが20才、25才で50才になるわけですよ。娘さんでしたらお嫁に行ってしまう、もし子どもが1人とすると50才であとすることもないわけですよ。これでおしまいですよ。でもあとずーとおばけのとこまで行くのですよ。だいたい女の人で78～9ぐらいですね。そういたしますと50から78まで28年間何もすることがない……。旦那は忙しそうにいろいろしておりますし、極端に言えば30年間一人で生きていかねばならない。孤独をかみしめながら生きて行く。この間のこの人生をどううずめるかということが、この人生にとってものすごく大きなウェイトを持ってきつつあるわけですよ。この段階をよーく考えて嫁の段階をすごす必要があると思ひます。嫁の間に何を考えるか、嫁に来て子どもだけが頼りで生活しておりますと、子どもが居なくなったら何もすることがないわけですよ。嫁に行った時の心構えとその

時何をするかでもってこの人生が決まってくるわけです。そうなりますと嫁に行くについて娘さん何を考えていいのか、あるいは何をしたらいいんだということが大きな課題になってくるわけです。

私はいろんなことを申しましたが、要するに平均寿命が長くなってきたという一つのポイント、子どもの数が減ってきたという二つ目のポイント、三つ目はそのことに触れませんでした。家事労働が非常に減少してきたことの三つが人生に於ける本当の長期にわたるレジャーの時期というものを私達にくれるようになった。この後半のレジャーというのは5月の連休みたいなものとは違うわけです。ずっと続いているわけです。この長いレジャーをどうするかということなども考えながら人生の設計をしていかなきゃいけない。その時期が青年期だということです。

次に人生に於ける青年期の役割、その2について考えてみようと思います。一体大人になるというのは、どういうことかということをごとで申しあげてみようと思います。

「分っとるがなー」とおっしゃるでしょうが、肉体的に成長しさえすれば大人になるものではないということです。とりわけ人間におきましては……と、いうことなので肉体と共に心の発達が見事に伴っていかなきゃいけないのですが、これがなかなか伴わないわけですね。話しの後半に出て参りますが仮性成熟、つまり本当の成熟でない人が増えてきたわけです。青年期のどまん中にある人にこういう言い方をしてお分り頂けるかどうか分かりませんが、要するに青年期というのは心の世界という果てしなく広がっていく精神の世界と、煩惱の根源となるような肉体の両極端の世界……肉のカタマリみたいなものと、崇高な精神のかたまりみたいなものが一生懸命統一しなきゃ、バランスとらねばいけないという非常に矛盾した時期なのです。言ってみればそこに自分というものが二ついるというわけです。それがどういう形になるかと申しますとある時には私ほどスバラシイ者はないと思って有頂点になっているかと思うと、次の瞬間には私ほどだめな人間はないと奈落の底におちるわけ。わー、幸せ！ わー、悲嘆！ 憶えありませんか、皆さん！ 結局それはどういうことかと申します

と、自分というものを過大に見たり、すごく過少に見たり、そういう気持ちが非常に動揺する時期なのです。一言で申しましたら一体私は何だろうか、どんな特徴のある、どんな人間だろうか、どんな性格を持っている人間だろうか、どんな能力があるのだろうかと一生懸命考えます。自分の将来の進路、人生という役割を果しながら生きていけば一番いいのだろうかと考えながら生きていこうとする。上等な言葉で申しますと、identityの確立といいます。

Identityということばは自己同一視性と訳されております。つまり、自分というものはどういうものであるか、自分の特徴は一体何なのかということ、一生けんめい明らかにすることをそういう呼び名で呼んでいるわけでありまして。私は55才ですけれども未だに、子どもの頃好きで好きでたまらなかった野球の選手の方がよかったのじゃないかと思ったり、ひょっとしたら吉本興業に行くよかったのじゃないかと思ったり、本当に自分にふさわしい仕事は何だったかということをも今でも不思議に思うのです。心理学は全く偶然でやっておるわけで、始めから心理学者になるなんて思ってもいないわけです。今朝もインフォメーションセンターに行って朝からニュースを見ておりましたら、人間国宝に指定されました刀士の方が出て来てインタビューに応じておられました。

「あなたは初めから刀鍛冶になるつもりでしたか」という質問に、「ぜんぜんそんな事はありません。」ということで大学で刀の研究会があってそこへ行ったらものゝはずみでそれをやり出したということでした。だいたい人生というのはものゝはずみということが多い。私の年配の回りの人でも聞いてみると、だいたいそんな人が多いですね。ちょうど人生なんていうのはパチンコの玉みたいに思えて仕方がないわけです。その都度、本当に自分はこの仕事をすべく運命づけられて来たんだらうか、もっと他にできたことがあったんじゃないかと思う人が多いのではないかという気がして仕方がないわけです。私の年において然りでしょう。あなた方の場合その渦中にあるわけでありまして、まだもっと他に仕事があったんじゃないか、ふさわしいものはなにかと一生けんめいに考えることが多いと思います。どの段階でそれを「じゃこれで行く！」と思うかという事が問題になってくるわけです。いつまでもずっとそう思って、何か

仕事しながらまだ他にあるのと違うかと思ってその仕事に打ちこめない心理のことをmiss-castの心理といいます。常にmiss-cast、miss-castと書いてフラフラしているうちに人生いかげんなところでいってしまう……にならないようにしなければいけないことは確かなのです。

今、Eliksonという人がidentity自己同一性という言葉を出したこと、青年は自分という者がどういう人生の選択をすればいいか、自分はどういう特徴を持って、どういう人間であればいいのか、まさぐり求めようとする心理があるし、又その時期が青年期なのだということを紹介しました。迷い続けの青年期がずーっと延びてその間大人としての義務や責任を果たさないというような、何とはなしにうろうろしながら青年期らしい現象がずーっと延びることをモラトリアムといていることを皆さんご承知だと思います。一切の義務と支払いの猶予、つまりそれを延ばしてしまって、何も仕事らしい仕事をしないという現象が起っている現代というのをモラトリアムの時代とよんでいます。学生の中にはもっと極端な病気みたいな形ですごしている人もいるわけで、名古屋大の精神科の笠原先生が中公新書に「青年」という本を書いておられます。その中に、青年期の中でも特に学生にこういう症状があるということです。

student apathyつまり学生の無感動という一種の病気みたいなものです。いろんな特徴がありますが一つ二つ申しますと、一つは正業は拒否して副業に精を出す。学校の勉強はちっともしないのにアルバイトは命がけでするのがあるかと思えば、学校へは行かないのに、遊ぶ時はきちんと起きて、新聞の切り抜きだけはきっちりして一日を終わっていくなんておもしろいものもあります。こんな調子ですからちゃんと卒業できないでひどい場合は、大学在籍可能な8年一杯行ってもまだ卒業出来ないという学生がいるわけです。こういう連中の一つの特徴は、大人、しかも社会生活の中でどっしりとたくましい仕事、競走社会の中できっちりと仕事をしているたくましい男そして女の人に近付きたがらない、そんなことをしたらこわいわけです。又同じ学生間でも一生懸命勉強している人、あるいはスポーツに打ちこんでいる人や集団から出来るだけ遠ざかろうとする、そういう傾向を持つ連中のことをstudent apathyというわけ

です。

私も昭和23年からずっと学生相手に教師をしているわけですが、30年を通して思いますのに私達の所に平気で雑談をしに来る学生ほど就職でもすぐ決まる。そんなみごとな法則みたいなものがあるような気がします。ところが私らのそばに近づきたがらない、さけようとする学生は就職が遅れがちですね。面接に行ってもちゃんとしゃべれないのです。たくましい大人の世界との近接の距離でもって、その人の成熟の度合いが測定できるわけです。やっぱりこういう場にやってきていろんな仲間、いろんな年配の人と物を言うようなチャンス、場を踏んでいきましたらだんだん克服出来ると思うのです。さてモラトリアムの話をつけ加えまして一番目のお話しの幕を閉じたいと思います。

人生における青年期の意義、その1、その2からお話しいたしました。人生の展望ともう一つは今、大人になるとはどういうことか、しかもどういふところに問題があるかということもご紹介したわけです。

そこで2番目のトピックスに移ります。こゝでは人生における役割の役割ということをしあげようと思います。役割と一言でかんたんに言いましたが、役割というのは一体どういう役割を持っているのか、別の言葉で言いますと、役割の意義です。一言に役割と申しますけれども陽のあたる役割と陽の当たらん役割があるということです。しかしその役割を夫々が果さないとな人生は展開しないということです。社会というものは構成できないということです。

違った役割を果たすことが社会を構成させるということが一つ、もう一つは、その役割がその人を生かすということです。社会を生かすことと共に、その役割を果たすことがその人その人の生きがい或いはやりがいというものを、生きる印というもの、気持の満足、心の満足というものを約束するということです。しかし、さっきも話しましたが、自分の生き方に不満でありましたら生きがいにならないわけです。そこが難かしいわけです。陽の当たる役割の人の場合はあゝ良かったと思うけれども、陽の当たらない、世間からはそう高く評価されないというようなところの役割を受け持たねばならない人の場合に、ついつい次の瞬間、次の瞬間に悩みが襲ってくるわけです。

その悩みと対決し、それを組み伏せるかどうかの問題になるわけです。しかし今日の社会では、その役割を一生懸命果たすことが人間にとってあるいは社会にとって非常に大事なことであるということをつい忘れさせるようなムードがあるわけです。社会の存続のためにその人自身の個人の喜びをするために一生懸命生きていく人間が大事なんだということを感じさせないような世の中のムードがあります。要するに世の中のためとか、会社のためとか、社会のためというセリフにだまされたらいかんぞというような雰囲気があると思いませんか。人間の心というもの、本音というよりは心の真実を極めるのが我々の仕事であり、建前とか、こうあるべきという話しは心理学には関係がありません。人間は真実、こういう風に動いているという動き方 cool に real に究明するのが我々の仕事なんです。そういう面から申しますと、人間は他人の為に役割を果たす行為に最も喜びを感じるという人間の本来の喜びを取り戻す必要がある。何故かということ人間の最も光栄ある喜びは、自分の居ること、自分のすることに他人が喜びを感じてくれたことを知った時です。自分のためだけでなく人のためにするということがどれ程喜びに満ちたものかということです。どうして大人が会社でがんばっているかというのは、僕がこうしていることがこの会社を支えているということが一つの喜びだからです。いろいろなリーダーとして活躍しておられる皆さん方には、これはいわずもがな、皆やっておられるわけです。その喜びがあるからこそやっておられるのと違うかと私は思うわけです。ところが大事なその役割が混乱しているわけです。今、日本の社会の中でこういう人はこんな役割というのはある程度あるわけです。男は男としての役割、女性は女性としての役割というのがあるわけです。女性の役割の範囲が、今ずっと広がってきているわけです。女の人の活動範囲がぐっと広がっているので、今までのようにこの範囲の中でというのがなくなってきたわけですが、それでも女の人は女の人の特有の特徴を生かした役割がある。男は男の役割がある。その役割が混乱してきていることに大きな問題がある。

2番目の話しの part 2 は役割の混乱ということです。世の中の運営の仕方

に二つのタイプがあることを紹介します。一つは父性型社会、もう一つは母性型社会というタイプです。父性型社会というのは非常に厳しく、シビアな社会、どちらかというところ冷たい実に冷厳な社会であり、万事の運行が冷酷に見えます。例えば欧米ではこのタイプが多く、パリの小学校1年生の落第の留年率が33%、5年間でちゃんと卒業できるのが27%しかいない。日本の社会とぜんぜん違う。アメリカの大学でも同じことが云えます。そう言った意味では日本は世界における珍しいこの残されている博物館のような国です。競争というのは常に落ちるか落ちないかの世戸際に立たされて生きていくということです。

そういう意味では日本は全く母性型です。親子関係の例を出せば余計ははっきりします。父性型社会の親子関係は“よい子だけが我が子”、よい子でない子は我が子でないという論理です。この理屈で悪い奴は殺せ。ハイジャックでせめこんできたら殺す、悪い奴はゆるせない。日本ならば金はいくらいるのか、どこへ行くのか……ということまで全て許していくわけです。

父性型社会の運営の原理は常に「切って断つ」切断の論理です。良いことは良いが悪いことは許さないと論理とすべてのものごとを契約で運行しようというわけです。だからアメリカなんかでも本当に弁護士を必要とすることが多いわけです。例えば自動車の交渉にしても日本からは商売人で、向こうからは弁護士というわけです。これに反し、母性型社会はほのぼのと甘い、暖い社会であるわけです。親子に側して言うと、“我が子は全て良い子”というルールで動いていくわけです。全てを包含の論理で運行するわけです。日本の社会はそういう意味では生きていきやすい。その昔日本の国ができた頃からすでにそうだったと精神分析のオピニオンリーダーの一人でもある京都大学の教育学部の河合隼夫先生がさかんに書いておられます。その中に神話を集め、その中に何がこめられているか分析されているのがあります。河合先生はヨーロッパに行かれユングという精神分析の先生の下で勉強され、ユング精神分析の免許皆伝第1号をとられた方です。古事記の中で“イザナミの神は、火の神を生みませるによりて神さりました”つまりヤケドすることによって火の神をつくった、つまり女性がやけどとして犠牲になって文明の糸口を開いたというわけです。

女性というものの影響力の強いのが日本の社会だということです。日本の場合メインの文化は女性文化です。縄文文化は明らかに女性文化、弥生文化は女性型の古墳、飛鳥、白鳳、天平はやゝ男性的、次の藤原文化の女性文化に吸収され、そのあとちょっとさしみのつまで鎌倉文化、ちょっと男っぽさ、そのあと北山、東山、義満、義政、金・銀閣寺のけんらの花を咲かせた女性文化に移っていった、その次、元禄、文化文政の女性文化の花形にいきまして、戦争の終わるまでちょっと男っぽさが仇花のごとく咲いたわけですが、昭和20年8月15日から女の天下に組み伏されているとこういうわけです。

社会生活では男性が幅をきかしている面もありますが、実際の現実生活の展開を動かしているのはどちらかというと女の人、特に家庭などは男は子どもの次といわれます。こゝで大事なことは、お父さんはこの役目、お母さんはこの役目という制約があることは基本的にそう大きくかえることのできないこと、この母性的な甘い論理というのが戦後の日本のあらゆる行動、物の仕方の根本になっています。女性的な平等主義の原理、本当の意味の激烈な競走をさせない、人間というものは差をつけたらいかんという考え方です。ところが心理学では人間には個人差があるということを見つけて、個人差の研究をしながら、100年たってるわけです。人間はどう見てもある人にはできることがある人にはできないことがあるということです。努力しさえすればどの子もそこまで行くというのはいくら、自分がどの程度できないかを認められることが大切です。私どもは昔、激烈に競走し、かつその競走が成績などに表われると、自分がどの位だめなのか、又こういうことに関しては何の位そこそこに行けるものかということがよく知らされ、冷静にそれを見つつ大きくなってきているわけです。ヨーロッパの民主主義と日本の民主主義は全然違う。日本は違いに目をふせて平等を建前にしておきながらその実「あいつはあかん、あいつはいい」と裏ではきびしく差をつける。これが問題です。始めから違いがあるから違いの中でこそ、人それぞれの特徴を生かしながら生きていけよと言った方がよっぽどFairでしょう。私たちに一番大事なことは、自分はこういうところが劣っているということを見つめ、その自覚をかくさないでそれをどう考えたいか

ということと対決することです。自己認識が正味分らないまゝ、表面的に平等を掲げることは、本当の意味で人間を冷酷な不平等におとし入れるのです。平等を掲げることが、人間に不平等意識をうえつけるのです。こういう状況の中で劣等感の complex をなくして自分の特徴を生かしながら役割を見出していくことがすごくむづかしくなっているけれども、それをしないことには一人一人の幸せは来ないと言うことを申しあげたいと思います。

第3番目に青年の意識の一般的特徴を紹介してみたいと思います。

現代の青年は緊張に立ち向かう勇氣に欠けると言われます。京都府立大の吉田先生がバウムテストという木の型を書かせるテストにより、女子大生のうち5人に1人が自主独立型、男のうち3割が女性型ということです。男の人が女っぽく、女の人が男っぽくなってきた、若者らしい主体的な行動意欲が大変減ってきたことをあげておられます。二つには緊張がおこるようなことからさっと逃げる、又拘束性を拒否する傾向です。三つには過剰同調傾向、その場に応じて何とはなしにふるまってしまうということ、友人関係ですら用途別にインスタントにつきあうような友人関係になっている。四つめは超依存の心理、例の近親相姦などはこれです。今日の青年ほど青年らしい特質を持たなくなってしまった青年は歴史上初めてだということです。三つの話をしましたが、最後に附録といたしまして、私の角度から二つ程情報を提供して参考にしてほしいということです。その一つは劣等感との闘いをさけないでほしいということです。私達は劣等感のあり場所をさけずに堂々とそれと対決して、そのことが人間の値うちに関係ないのだと思ひ至るようなたくましさを持つことが必要です。二つめは人間には二つの能力があるということをおのこし知ってほしいということです。一つは知的能力、二番目は態度能力、態度というのは一つの能力です。態度というのには二つあり、一つは自燃性、みずからもえる能力、もう一つは他励性、他人を励ます能力で、これは他人を励ますと共に他人から励ましてもらう能力ともつながっているわけです。自燃的態度を伸ばすためには常に明るく生きていくこと。知っているよりは知っていくという態度をとり、好奇心に満ちた野次馬精神をもつこと。次には計画をたてる或いはやってみるということです。

他励的態度を伸ばすには、自己開示。自分を開いていく。集団活動を行って多くの仲間と結びつきを持つ中で、こうしたら悲しいだろうな、うれしいだろうな、等人間相互作用から起こる心の動きを鋭敏にキャッチできる Sensitivity（感受性）を養うためです。三つめは役割を果たせる人間になること。役割を果たすということは自分のためでも、他人のためでもあるということ。つまり他人と自分を気持よく関係させる能力ということです。他励的態度と自ら燃える自燃的態度が合体してあなた方の人生、青年期がみごとに切り開いていかれるだろうということを申しあげて話しを終わりたいと思います。



社会と青少年



甲南大学文学部教授

増田光吉

まず「社会」という言葉をよく考えてみたいと思います。日頃なにげなく使っていますが日本語としては全く新しい言葉です。江戸時代にもなく、外国語を訳す時になってつくられました。言葉がなかったということは、イメージもないことです。つまり、日本には「社会」という観念がありませんでした。

英語の *society* に何という言葉を与えたらよいかということで、はじめは、世間とか交際とか、会社という訳語さえ使われていました。日本人にとって社会という言葉はながい間わかっていませんでしたし、又必要もないものでした。一方外国では、*society* の語源はローマ時代までさかのぼれて、西洋人にははじめからそういう言葉やイメージがあり、ながい間使われてきたのです。

このような事情から日本人にとって「社会」のイメージはまちまちです。ロータリークラブでは、社会奉仕という用語がありますが、その「社会」は *community* といういみで、「地域社会」としてつかわれています。地域社会は我々の住んでいる場所ですからよくわかりますが、もう一つ大きい *society* のほうはわかりにくいのです。

青少年又は青年とは何でしょうか。活動力やものを知る力などは1才の子供の方が青年より旺盛です。青年と子供又は青年と大人はどう違うのでしょうか。青年ははっきり定義できません。子供と大人ははっきり区別できます。青年は大人の一部で大人のスタート・ラインにいる人という事ではないでしょうか。

そこが子供と青年の一番のちがいです。

子供は何か覚える時、必ず順序があります。順序をとびこしてやるということは絶対にありません。青年はその順序を守らなくてもよいのです。世の親は、学校へ行って、卒業、就職、結婚とだいたいの順序を考えていますが、実際には、その通りにはなりません。どの順序をやってもかまわないのですが、たゞ問題は、君達自身が選択しなくてはいけないということです。

2才の子供と5才の子供を比べることは出来ませんが、年をとれば年の差はそれほど大きな意味を持たなくなります。20才すぎれば5才位の差は問題にならないような面もでてきます。子供は自然の摂理に従って成長し、時をまてばよいのですが、君達には何を選ぶかということがみなさんの手の中にあります。それがたいへんむつかしいことなのです。

多くの青年達はそこで迷います。色々のことを思いなおしはじめますが、そのことこそ選択がはじまった証拠です。青年期には、今まで順序よくきていたものが全く裏表になるくらいの変化がおこるものです。しかしこの時期を君達が誠実に生きていけば、中年には中年の選択、老年には老年の選択があるものです。青年期とはそう特殊なものではなく、大人になった第一歩というところで非常に急激にやってくる時期、大人の仲間入りする時期と思います。

自分個人の感想としては、二度と青年にもどりたくありません。自分のもった青年期の苦しさをイヤというほど覚えています。君たちも多かれ少なかれ同じような思いをもっているのではないかと思います。私は今の自分に充分満足しています。今からの選択の方に興味があります。

しかしもどりたくない様な青年期をもったということは、現在の私にプラスになっているのではないかと思います。その時の苦しさの中から得たものを中年期にもちこし、さらに老年期へ生きる力のエネルギーとなるように思います。真剣な青春を生きていけばそれにつづく時代に何かエネルギーとなって残っていくと思います。過去にもったものが、人格の奥の方でつながっていて、大人としての入口で持ったものを持ちつゞけていくように思います。

私たちの年令になると、大人といってもさまざま、なかにはとても一人前

といえない人もいることがよくわかってきます。君たちもきびしくみてほしいし、立派な大人を探してほしいのです。モデルになるような大人は世の中みまわしても少ないし、立派な大人になるのはむつかしいです。ある意味でつらい青春を充分にもち、そのエネルギーで大人になる道を歩んでほしいと思います。そのスタートラインが青年ではないでしょうか。

昔の青年と今の青年のちがいを考えると、昔は青年という人生の段階がなかったのではないのでしょうか。子供からすぐ大人になって青年という悠長な時期がなかったのではないのでしょうか。昔とは、明治のはじめの頃ですがその時代は生活が苦しく少し大きくなればみな働かねばなりませんでした。農業、丁稚、奉公など12,3才で一人前としての責任がありました。悩むとか選択する時期が持ちにくかったのです。

しかし、そういう意味での青年の役割は大きかったのです。たとえば、村の中で、一大事の時、若者がいなくなったら困ります。火事や病人の運搬など、青年（というより大人の中の一番の精鋭）のしごとでした。江戸時代には娘もまた生産者として重要な働き手でした。したがって早くは嫁にやるのは惜しかったのです。女性の地位が高く、家庭に対する貢献も今とはちがいます。女性を出しおしりするので、男の方は妻をもらうのは大変なことでした。柳田国男先生の説によりますと、結婚の仕方もちがいで、男が女の方へ何年か通い、やっともらえるという状態でした。婿入り婚といわれていますが、養子にいくのではなく一種の通い婚のことでした。

徳川時代には100人のうち90人が農民で、農民の間では婿入り婚がふつうであったようです。私も昭和20年代に、婿入り婚の残っていたところで経験者の話をききました。娘はある年頃になると寝る場所をかえます。これからデートに応じますよという態勢づくりをします。村の男は早速デートをはじめますがムードのあるものではありません。昼間働いて、夜間、ちょうちんをもって堂々と訪ねます。ぐずぐずして提燈がすでにおいてあると先客があるということになり又次へまわります。これを夜這いと言い堂々とした結婚をするための手段でした。

昔は大半が恋愛で、今のように処女性など高く買われておらず、おゝらかなものであったようです。そういう時、二人が合意すれば男の人が自分で酒肴をもって娘の親のところへ頼みに行き、これを結納といたしました。現在でも結納をみると昆布、肴などと書いてあります。それからその男の人は正式に娘を妻として独占することになります。でも夫のほうは、当分の間、両方の仕事をしなければなりません。1年から5～6年通い婚をして、子供が1～2人できたころ、やっと女が男の方へうつり、これを嫁入りするといいました。関西一円ではほゞこういう型だったようです。

男の方は12,3才になると若者組というものに入り一人前とみとめられました。労働の貸借に男1、牛0.5という計算をしました。たとえ12,3才といえども若年組に入っていると男1と計算されました。若者組に入るということは人生に象徴的なもので今でいう成人式のようなものです。若者組に入って、男同志のつき合い、異性とのつき合いもはじまりました。

皆さんは一人前ということはどう思っていますか。一人前だと思っているかどうか。又そう思っているのならなにをもってそう思っているのか。思っていないのならどの点が欠けているから一人前と思いきにくいのか。つまり現代は一人前ということがあやふやになってきていると思います。以前は若者組に入ることが一人前ということなのですから一度に子供から大人へうつれたのです。丁稚でも小僧でも一人前でした。

漁民では、同じ船にのると心を一つにしなければならないし、色々のことを先輩から教えてもらわなければならないというわけで、若者組をとおして教育が行われたのです。反面、だべりをとおして人生の悩みとか配偶者の選択なども行われました。ライラで夜の2時半、3時までだべりというのは、若者組の人たちが昼間働いて、夜ねむい目をこすりお酒などのみながらしゃべり、手仕事していた有様に近いようです。

こういう時代がつづいていきましたが、明治の中頃になると若者組の組織は、村々から急速にきえていきました。それは青年が町へ出ていったこと、徴兵検査で兵隊に入り性病をもってかえると村中にうつるおそれが出てきておらか

な夜這いが出来なくなったことなどが理由といわれています。私が感銘をうけたのはやめるのに一番反対したのが女の人だったという事実です。今後どういう風にして私たちは結婚していったらよいのかと訴えたそうです。今もその悩みがつづいているのではないかと思います。

こうして結婚していく仕組がつぶれてしまった後、日本の社会では異性交際について暗い時代がつづきました。皆さん方の親はそういう時代に育っているので新しい時代が来ても経験がないので異性交際についてうまく教えることが出来ないのです。

米国と日本のちがいをたとえてみますと、米国は「階段」で足のつよい人が勝ちますが、日本は「エスカレーター」で先がつかえるかわりにまちがいなく登っていきます。米国では小さいうちから恋愛の方法を教え、大学でも勉強をする反面、デートも熱心で涙ぐましい努力をしています。デートはお遊びでなく唯一の結婚への道であるところが昔の日本の結婚へのしくみに似かよっています。

現代の青年はどういうところに問題又は特徴があるのでしょうか。子供と大人という2つの世代の間に、無理やり青年の世代がわりこんできたように思います。10年位前から世間の様子が一変しました。服装も、子どもでなく大人でもない独特の青年スタイル、すなわち長髪、ひげ、独特の服装などのジュニア文化がはやりはじめました。

はじめはもめました。学園紛争の時期でもあり、世界中で青年パワーがふき出し、今は落ちつきをみせていますが、そのころ一度に青年の世代が出現しました。何故青年の時代が出てきたかという、一つは教育で、小学校卒業後六年間一種のひまな期間があり、その上大学にいけば又四年間ひまな期間が出来ます。

身体は大きく、多くのことを知っているし、又、何でも出来、自信があるのに、非常にひまな期間が出てきました。責任の猶予期間ともいうべきもので、昔なら一人前になっていて、社会的責任を問われる年令であるのに、学生という状況のなかでそれらを猶予されています。まるで執行猶予がついているよう

なものです。

国民の約 9 割が高校、3 割が大学に行くようになり、昔の人になかった時期をもち、その時期を自分達で意味づけようとする風潮が出てきました。青年の主張がどんと前面に出て風俗にあらわれた青年文化（ユースカルチャー）が10年ほど前から若者の手で作られてきました。大人の文化、子供の文化につゞく第3のカルチャーがユースカルチャーです。

こうして日本の第3の近代文化は青年が強引につくり出してきました。今の君達はその先端にあると思います。でも服装こそ赤や黄に変わっていますが中味まで確固たるものがあるとは思えません。結婚についても一応ある方向はもっているでしょう。米国では結婚についてもユースカルチャーがすでにあります。親も学校もそれを認めて自分の子が負けないように教え、学校もなるべく機会を与えるようにしています。高校ですら男女の知り合う機会を提供するため、ディスコのパーティーなどをします。日本では服装もうるさく、ディスコパーティーなど思いもよらないようですが、今は過渡期で、じりじりとユースカルチャーが当り前のようになってきています。日本の青年の中でもユースカルチャーが芽生えつつあると思います。

だが問題は、青年期をあまり誇張しすぎるのは思い上がりではないでしょうか。青年期は、ものの順序、選択を自分の手ににぎってスタートしていく時期です。それは今はじまって、大人として死ぬまでつゞくスタートラインにたっているのだから急激な変化であることは確かなのですが、ユースカルチャーに眩惑され、ユースカルチャーを主張するあまり、世代のギャップをつくることは完全に間違っていると思います。私はユースカルチャーの否定論者ではありませんが、ユースカルチャーを正しい形でおしすすめてもらわなければならないのが日本の現状です。

たとえば結婚についてもどういうすすめ方がいいのか。不純異性交際はいけないというがそれならばどうしたらいいのか。学校の先生にきいてほしい。事なかれ主義の先生なら返事は出来ないと思います。どうすればよいのかということをおしすすめてあげてほしいです。

今、なんとなくぼんやりとした気分を感じておられるユースカルチャーをあらためて真剣に考えなくてはいけないと思います。ユースカルチャーを強調しすぎて大人との対決や子供をバカにするという形になるのは面白くありません。人生を輪切りにしてその差をつよく考えていくのは不賛成です。自分の青年期を思い出して、いま、一番いやであったと思うことは、自分を見直す時期であるので大人がよくみえたことです。自分がいやになり、かえって無理をし、まわり道をして、結局、もとの自分にしかなれなかったという思い出です。大人とちがう、子供とちがうとあまり意識しすぎるのは考えものです。

ユースカルチャーは米国からやってきました。米国では、子供と大人の間の文化と考えられてはいますが、それかといって大人の文化と全くちがうという意味ではないという点が大切です。外国の学生をあずかる家庭では、日本のお父さんお母さんとゴタゴタがおこりますが、それは考え方がちがうからです。デートの常識では、午前1時や2時に帰宅してもよいわけですが、それが日本のお母さんに理解できないのです。日本の子供は小・中学生のころは自由ですが、君達のとしごろになると不自由になってきて、中年がとりわけきびしく、再び自由になるのが年寄りです。米国の場合は反対で一番不自由なのは子どもと年寄りです。

米国の青年が日本をみた時、非常に不可解なことが多いらしいのです。日本の学生はどうかと聞くと、政治・経済・社会の話はにげて遊びの話が多いと痛いところをつかれます。全般の風潮としてやはりそうだろうと思います。米国の場合、宗教とのかゝわりが強く、最近おこなわれた世界の青年の意識調査によりますと、米国では宗教に関心のある青年が8～9割で信じられないくらい多いのです。日本の青年はほとんどが関心ありません。米国にいる以上宗教からはにげられないそうです。米国と日本の、ロータリ・クラブの例会の違いは、宗教（食前のお祈り）と愛国心（米国をたゝえる歌をたくさん歌う）です。

米国の子供達が小さい時からたゝきこまれているのは、早く大人になりなさいということです。だからかなり小さい時から無理をしています。例えば新聞配達もお金がほしいからでなく、やっていないとバカにされるからです。社会

とのかかわりについても、社会に貢献する人に対する評価が根本的にちがいます。ボランティアを日本では特殊なものともみますが米国ではそう肩ひじはったものでなく何かちょっと自分の出来ることをする、機会をとらえてやるという感じで、そういうことをしない人は一人前とみられないのです。日本でも広い意味で意識の変換が必要です。

君たちはユースカルチャーをひっさげて古い日本に対する批判として出てきました。しかも単に服装、音楽などばかりでなく、米国の青年のもっている内容的なものも含めて、意識の変化と社会への影響力をしめしてほしいと思います。日本でも、ユースカルチャーの中味はすこしずつ濃くなっていると思いますがしっかりとみすえてほしいものです。

米国の奥さん方はありとあらゆる活動に参加していますが、日本ではそれが形式的になっています。たとえばPTAは子供が学校にいる時だけということ親の自主性や個性がありません。米国の場合は、子供の幸せと愛護を願う団体で誰が入ってもよく、子供がいなくても入れるし、高校生でも子供がすきだということで入れます。流されるのではなく自分で選択していく態度があります。青年期というのは丁度それがはじまった時なのです。

10年前からユースカルチャーが割り込んできて、風俗の上で、はなやかに目立つ服装、音楽、レジャーなどありますが、もっと大切な、大人としての出発点という問題がふくまれています。しかし我々の世代では、残念ながら君達を教えることが出来ません。配偶者選択一つにしても経験不足で教えられません。これからの君達は、ただ単にマスコミなどで調子よくとり上げられているユースカルチャーだけを通して社会をみていくのではなく、もうすこし基になっている世界をよくながめてほしいものです。日本もやっと先進国と肩をならべるところにやってきました。いわゆる国際化の時代です。その時代に、はじめて波にのったのが皆さんの世代だと思います。我々はどうしても乗りおけています。皆さん方はつらい経験をして、苦しんで初代になっていたどかなくてはいけないのです。2代3代となれば、社会とのかかわりも安定してくるでしょう。皆さんにはご苦労ですけれど、そのへんのところをよく考え、自覚していただきたいと思います。

国際理解



神戸大学経済学部教授

新野 幸次郎

今日私に与えられたテーマは「国際理解」ということですが、専門が経済学でありますから、経済に関する問題を中心に国際理解の問題をお話することになると思います。まず、国際理解に入ります前に理解というのは Understand という言葉があることを皆さんよくご存知と思います。これは真意・原因・性質等を会得するといった意味があります。理解にはその他 apprehend（本質の一端を知る）comprehend（全体的に把握する）等もあり、一口に理解といっても非常にむづかしい問題をともなって簡単に理解するとは言えないものがあります。

国際理解を、まず自然についての理解から言えば、国際的な誤解はほとんどないと言えましょう。自然理解とは自然現象を観察し、その中にある種の法則性がある又相互関連があることについて長い間の科学的知識の発達の中で蓄積があり、それについて国際的な差がないと考えてよいと思います。ところが人間に関する問題、或いは社会や文化についての理解については、国際的な差が大きいと思います。例えば人間について言えば、相手に対する思いやり（相手の立場にたって考える）なしには人間を理解することはあり得ないことであります。他人を理解するという事は自分の今までの固定観念をくずしてしまうのと同じ意味を持つことになります。昨夜フォーラムの時も皆さんのお話に出ていましたが、今井先生という方は大変な方でありまして人を理解する、人への

愛情、思いやりという事を中心に生きて来られているような方ではないかと思
います。そういう方であってはじめて人を理解するという事が可能になります。
思いやりの心の欠けている人には人を理解することは不可能といえましょう。
私はグループの一人一人に対する思いやりの気持が自分の中に出来ないとリー
ダーにはなれないのではないかと思います。これは国際理解についても同じ事
が言えますが、様々な人種に対してそれらの人々の立場になって物を考え、色
々な発想を follow することは難かしいことであり、こういう事の出来ない
人に国際的な人間の理解はできない。外側から眺めているだけでは理解はでき
ないことが分るわけです。人間が作りあげている社会や文化になるといっそう
顕著になって来ると思います。社会とは複数の人間が色々な状況を前提にして
作りあげている関係でありますから、従って人間についての理解が出来ない人
に社会の理解はあり得ないというのがテーマのポイントでもあります。文化の
理解について一つのテクニカルなお話をしてみましょう。

絵画、一般的芸術、刀剣等を理解するということはどういう事が必要条件な
のか考えてみましょう。例えば刀剣鑑定については、30,000時間ほど、いろ
んな名刀をみ、本を読み、感動するようになれば刀が本物かにせ物かだいたい
分るようになると言われます。又20,000時間でほゞ分るようになると言われ
ます。同じ事が絵画についても陶器についても言えると思います。という事は
文化というものを考えると、我々はその事に集中することなしには理解するこ
とは出来ないと思います。我々の生活水準が上り、文化の時代等と言われ、美
術館にみんなが行くという傾向であります。これも悪くはないのですが、も
し本当に分ろうとするならば集中してやってみなければ理解という事は出来
そうにないと思います。しかし大変ではあっても努力することによって理解はで
きるのです。社会となるともっと複雑で大変な問題をその中に含んでいます。
昨春、K.E Boulding という米国の経済学者が、来神され、講演されました
が、ポールディング教授はかねてから一つの社会が存立するには次の三つのシ
ステムが必要だと言っておられました。

一つは、交換体系で、これは経済の領域に当たります。

二番目は統合の体系で、統合というのは社会の構成員がその役割をお互いに認めあうということであり、情報の領域に当たります。

最後は、脅迫の体系で、これは政治の領域に当たります。（省略）

宗教、倫理、道徳等も社会の差によって違います。山本七平さんは、それを例えばイスラム教の社会は、原理社会であるのに対して日本人の社会は、状況論理社会であって、原理が全然ないわけではないが、状況によって判断する社会といわれます。

原理社会においては、してもよい事と、してはならない事が規則によって非常にはっきりしているので、ある意味では人間は行動を起しやすいといえます。しかし日本のように状況論理社会では状況によって異った判断をするので、こういう社会に生きる事は、生きる為に変能力を必要とするわけです。相手国（社会）が夫々に違った論理の社会である場合、相手を理解するという事は大変むづかしい事があります。例えば日本人は自分の宗教を持たない人の数が非常に多いのですが、原理社会に属するイスラム教やキリスト教徒の多い社会では宗教を持たない人など考えられない。そんな人は動物ではないかとさえ考えるわけです。そういう点でも国際理解を考える時、断層が深いといえましょう。夫々の社会の生いたちが、夫々の社会特有の型に出来上って、一方は原理社会的であり、一方は状況論理社会的であり、一方から一方を理解することが大変むづかしいと思います。人間の理解ならこの二つの社会同志でも出来得るものではありますが、社会全体となると理解はむづかしいのです。

社会を考える時、Holon（全体子）という考え方が重要視されだしてきました。これは物事を階層的秩序の中で把えるのではないという考えに通じています。

国際的に相手の国を理解してみようということになると、相手の国の生いたち（歴史）から政治・経済等をつかまないと本当の意味の理解は出来ないのでしょう。

ウィルキンソン著の「誤解」という本は、国際理解の具体的な例を考えるのに大変面白い本であり、近頃興味をよんでいる本でもあります。

かれは1500年代のヨーロッパと日本を対比しながら、世界が日本を誤解していることについて述べています。ヨーロッパの人々は日露戦争より以前には日本人をとるに足らぬ人種だと考えていました。ところが日露戦争において大國ロシアを倒した日本という国の存在に、一般の人達ははじめて気がつき始めたウィルキンソンは述べています。(省略)

経済学の方面から見ると、現在日本の貿易は大変な勢いで拡大しており面積は0.3%しかない日本はいま、世界中のGNPの10%をしめ、世界貿易の11%をしめています。最も顕著なのが輸出の急増です。20年前には日本車を外国で見ることはまれであったのに今や世界の自動車生産量の第一位は日本です。この風潮をヨーロッパの人達がどうみるかというところ次のようにみています。

1. ダンピングをしている。

その為、労働者の賃金を切り下げコストを安くしている。しかし実際には日本の賃金はアメリカ・西ドイツ・スウェーデンについて高く、これには当てはまらないが、多くの外国人はこのように考えています。

2. 経済的侵略によって各国を支配しようとしている。

3. 政府が経済的侵略を手伝っている。政府が関与して日本株式会社を作っている。

このような見方についてウィルキンソンは正しい理解をさせたいと述べ、日本は資源が少く、生産を増加させようと思うと、どうしても石油を中心にエネルギー、原材料のすべてを輸入しなくてはならない。なおかつこの中で赤字を出さないで日本国民が生きていこうとすると、輸出の増大にしか方法はない。その点アメリカのように広大な土地や豊かな資源があり、国内で生産し、まかなう事が比較的しやすい国とは違うという事を知ってもらう事が大切ではないかとこの本の中でも述べています。

国際理解の問題を考えていく時に、誰も否定しない事実の中に日本人の貯蓄率が大変高いことがあります。

可処分所得(自分の手元に入った所得)のうちどれだけの貯蓄率をするかという数字を表すと、

(1979年) $\frac{\text{貯蓄}}{\text{可処分貯蓄}} = \text{米国 } 4.9\% \quad \text{日本 } 21.4\%$ であり、

$\text{経済成長率} = \frac{\text{貯蓄率}}{\text{資本係数}}$ で計算出来るるとすると資本係数はほ

ぼ4位と考えてよいですから、経済成長は日本は5、米国は0.4となります。こういった数字は国際間において誤解の発生する余地のない誰もが認めるものであります。又投資率の数式からみても

$\text{投資率} = \frac{\text{固定投資}}{\text{国民所得}}$ 米国17.7% 日本31.7% とかなり差が出ています。

労働生産性の上昇率からみても

$\text{可能成長率} = \text{労働人口の増加率} + \text{労働生産性上昇率}$

であり、労働人口の増加率は0.9% (毎年)、経済成長率が5%とすると労働生産性は4.1%は上昇していることとなります。こういったことも国際的な誤解はありません。

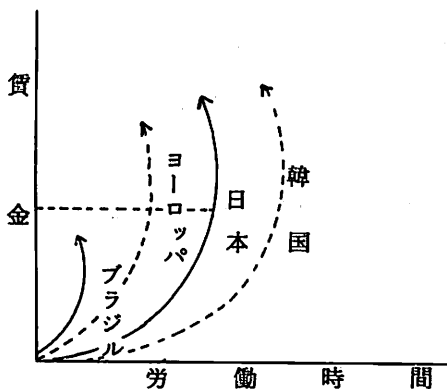
G.N.P.の中で政府が支出している割合をみると、1979年においては、

英国44% 日本25% 米国35% となっており

国民100人当りの公務員の数字からみても

英国8人 日本4.5人 米国10.5人の数字が出ています。

経済学的には効率の悪い国ほど成長率が良くないと言える。このような数字の事実には国際的誤解はないのに、どうして日本の経済がよいかという点になると国際理解は非常にむつかしくなっています。



労働供給曲線からみると、グラフが示すように労働者の勤労意欲の変化が各国の経済発展に影響を与えるようになっていと言わねばなりません。このグラフはある賃金水準までは賃金が上昇するなら労働時間をふやしてゆこうとするが、賃金がある一定の水準になるとそれ以上はむしろ労働時間を減少

させようという性向が国によって違うことを示しています。

別の見方によると、労働組合を対比した場合、

第1に日本は企業別労働組合であるのに対し、イギリスは職種別労働組合（全国組織）で、一つの会社の中でいくつもの労働組合があり、職種別の労組によって経営者と賃上・労働条件について交渉するわけであり、一つの企業の中で職種別のストもあり得るわけです。部分的ストによって全体の生産さえもなされない場合もあり得ます。

第2にはショップステュアートという組織が長い伝統の中にあって、就業時間外に各組合をまわり、労使交渉をします。彼等は法的には身分の保証がないわけですから、必然的に意識の進んだ人であり、現場の労働者に大変信頼があります。仮りに職種別労働組合で妥結したものであってもショップステュアートが現場で問題点について疑問をなげかけた場合、現場の仕事の動きはなされず山猫ストにおちいる事もあり得ます。

社会的構造から言っても、諸外国は日本のように一般的社員から順に上るような型をとらず、個人の資格・評価が絶対的な権威を持つ社会であります。

また、米国においては企業の中の会長が経済の実権を持つことが多く、また会長は株式配当を多くして株主の利益を重視しますので、社長や副社長は長期的な投資よりも短期的に物を考えやすくなるといわれます。これにくらべて日本では長期的に物を考えるFuturist（未来主義）が多く、会社は企業投資を行い労働生産性の向上をはかることとなります。貯蓄高が多いこともこのFuturistなるがゆえです。

また、各国の生産量は次のような生産関数で説明されます。

$$\text{生産量} = f(\text{土地}, \text{労働}, \text{資本})$$

この考え方によりますと発展途上国は、土地や労働や資本が少ないから生産量が少ないのだということになりますが、本当はそうではないという学者もいます。日本は国土面積に対する国民所得は米の10倍であります。言いかえれば、土地の値だんがアメリカの10倍であってもおかしくないと言えます。一般に、エネルギーがなく、物的資源・空間などのとほしいところは経済の成長はむづ

かしいと言われますが、この点では日本は非常に悪い状況であるにもかかわらず生産性が高いのは know how の蓄積が高いからであると、ポールディングは言っています。know how の蓄積は非常に長い間かかるものです。徳川中期の中頃で、日本は米国の現在の文盲率と同じであります。これには教育を徹底して能力の開発を行うことが大切だと言えます。昨夜の皆さん方のフォーラムでも、まじめに議論し、Know how についての視野を広めていただきましたが、リーダーとしてやってゆかれるにはこれは非常に大切なことだと思います。日本の企業においては、中小企業のレベルで行われているのが、いろんな分野に影響してゆく大事なファクターになります。こういう事がはっきりしてゆくにつれ、最近外国において日本についての勉強をせねばならないという考え方が起りはじめました。過去においては、日本ほど外国に対する研究がさかんであり、外国の知識に学ぼうとする姿勢をもった国はなかったようです。しかし、国際理解についてきわめて受身的でありました。

ロンドン：エコノミストの最近号にノーマン・マクレイという人が、日本について特集を書いています。日本は成長を落さなくてはならないかという疑問に対して、今後も日本は成長を続ける数少ない国であるとし、世界で最も安全かつ最も健康な国であり、日本に我々はいろんな事を学ばねばならないと述べています。

米国のタイムズ誌（3月30日号）にも特集として、ヨーロッパの社会はあまりにも個人主義であり、アメリカも70年代は me の時代になり過ぎたため、ヨーロッパもアメリカも低落してしまったと書いています。そして80年代に you の時代にならないとアメリカの社会は回復出来ないとも力説しています。

自分が生きる為には人も満足出来る状態でなければならないし、お互いがお互いの為に働きあう状態でないと社会の成長はあり得ないと思います。国際的に受身の立場から日本を外国にどのように理解されるかという事を考え、積極的な国際理解を自分達でしなくてはならない時代が来ているのです。人間について思いやりの精神があるかないか基本的に大事な事であると思いますが、人を理解するというのは単なる思いやりのみではなく、全体の中においてその人

を理解しなくてはならないのです。自分の認識がトータルでないと人を理解し、受けとめる事が出来ないと言えましょう。

国際理解は大変な困難を内蔵しております。しかし私どもの考え方、生き方までこれからは国際理解をいかにして進めるかということを中心にして考えてゆかなければならないとも言えると思います。

以上は講演要旨を整理したものであり、一部省略した部分もあることをお断りしておきます。



講演 II

体験を通して

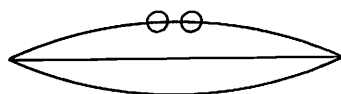


山村硝子社会活動部

アドバイザースタッフ

鳥羽芳機

まず最初に乗りくみましたカヌーの説明をいたします。



長さ 4 m 44 cm

巾 88 cm

深さ 27 cm

2人乗りで、外側の材質がテント布、防水布で出来ており、内側の構造が木製の折りたゞみ式になっています。前後に一つづつのシートがあり、2人常時同じようにこぎ、休む時には同時に2人とも手を止めるという方法をとります。だいたいの航路を説明しますと、沖縄の海洋博のあった本部半島から辺戸岬、こゝまでを南西諸島の海の状態を知るためのテスト航海というつもりでこれをとりました。沖縄の最北端、辺戸岬から与論島、沖永良部、徳之島、奄美大島、与路島、名瀬、この間小さな島が澤山あって次に宝島、横当島、悪石島、中ノ島、口之島をまわり、このあと屋久島、種子島をまわり鹿児島県の志布志港に入る予定をしていましたが、船の方がどうしてもこれ以上続けることの出来ない状態となり、一応中ノ島、口ノ島あたりまでは竹とロープを結び合わせて行ったのですが、志布志港までは長いと潮流が非常に早いので予定をこゝまでに変更しました。最初は全行程で約730 kmの予定でしたが、実際には44日間で600 kmとなりました。

特に南西諸島に憧れがあったわけではないのですが、ひょんな事から司馬遼太郎さんの街道を行くという本を読んでいました時に米の伝ばという所が2行か3行あり、これが頭の中に残っていたところ、一諸に航海しました富樫君がトガシ計画しているということで、一諸に漕ごうかと計算もなしに、単純な気持ちで航海に出たわけです。沖縄の最南端波照間島ハテルマジマの漁師の方の間に、漁に出る時には食料としての米ではなく米の種の実を持って出るという風習が今はお守りのような型で残っているということが頭の中にあっただので、米の伝ばに関して南の

方から順番に上ってくるとよいのではないかと勝手に判断したわけです。実際に徳之島あたりでは文化財として文部省が認定するような遺物がほとんど出てこない。文部省の認定するのは朝鮮半島経由の北九州へのものばかりで、南からの物品や、人の交流があった事を認めてもらえないと行ってから聞いた話ですが、私にしてみればそういう風習が残っているなら、人力以外の動力を持たないカヌーで何日以内に到着しないといけないという束縛がなければうまく渡れるのではないかと思っていたわけです。沖縄から、徳之島、奄美大島、名瀬迄の間は天候がよかったので4日間1日の休みもなしにこぎっぱなしでこいでいました。ところが吐噶喇列島に入ってから九州南岸の梅雨前線がなかなか去らず、特に悪石島では13日間とじこめられ出るに出られない状態でした。沖縄を出港する時には海上保安庁その他が相当すごい剣幕で120%の確率でこんな船ではだめだと言われました。これがカヌーではなく、ヨットのような船籍証明のある船、船として認められている船であれば、海上保安庁に出港を停止する権利があるらしいのですが、カヌーに関しては管轄外のものであり、法律もないので行くなら仕方がないけれども……というかんじで、結局無視したわけではないのですが、海上保安庁勧告も充分配慮に入れたうえでやってみたという結果になりました。もっと日にちがあり、船の修理をする時間があれば決してこの程度の船でも南の方から順番に島づたいに九州に到着することが不可能とは言い切れないと身をもって体験したわけです。

沖縄最北端の辺戸岬から余論島まで約10時間、沖永良部から徳之島まで12時間、前後左右に体を動かせるのは15cm位しかなく同じ姿勢のまま、そして防水のゴム状のもの（スプレーカバー）をはき船の中に座りこんで50分こいでは10分休むという普段では考えられないことですが、船に乗ってしまうとこぎつかないことにはどうしようもないという状態におかれてこそ漕げたと思うのです。海の状態は、フィリピンの東の方に黒潮が発生し、沖縄の西の方から北上し、九州の最南端に上るわけですが、黒潮の巾が200km、中心の水深が700m、満潮、干潮の大潮にかかると、潮の流れが約9km、我々の船が2人でひっしにこいで平均時速5km、それが9kmで流れているところを北上するのですから、常

に60度位あらぬ方を見つめながらこいで行って計算通りの所につけるといふことのくり返しでした。私は昨年第2回RYLAの田中先生の講義のなかで、ルパン島で発見された小野田さんがどうして生存し得たかというお話の中で、極限に近い2人という型の間関係においてどうして争いが起るかということを知っていたものですから、徹頭徹尾、航海中にどんなフラストレーションが起きようともいっさいこちらの方からけんかをふっかけるといふ事、爆発させてはならないと頭にたゞきこんでいました。例えば悪石島で13日間一つの島に2人きりの生活が続きますと、私がめしを作って出来ると「おい！めし」と言うのですが、相棒の方が「頂きます」1日中2人でいてこの二つの言葉の会話しかなくなってしまうのです。最終的に、13日目に食べたのはたしか野生のニラしかなかったと記憶していますが、こんな生活が続きますとやはり、私にとってRYLAの話を知っていなければ、途中で精神的にまいってしまって、船がパンクするというより先に、自分の精神的な状態がパンクしたのではないかといま考えています。

大ざっぱに航海に関してはこの程度ですが、宝島に行きました時の面白い話があります。宝島では記録にのっていない地名をさがしていたのですが「イギリス坂」という面白い名前の坂が郵便局の前にあったものですから、その辺の人に聞いてまわりましたところ、いろんな古い文献をさがして研究してられる学校の先生が、やはり小説になった「宝島」のモデルじゃないかと言われました。1700年代に附近を航海中のイギリスの船員が食料難になった時に、この宝島に上陸して牛か羊を射殺しようとしたのを反対に村人が銃で打ち殺し倒れた場所にイギリス坂とついているそうです。小説に出て来る宝島の位置とこの宝島の位置とが非常に似ていると島の方は話していただきました。トララ列島の中に島が七つあり、郵便局のある島が二つ、七つの島におまわりさんが1人、小学校・中学校は合わせて、宝島小・中学校、亜石島小・中学校となっています。

小宝島の人口は現在20名で全員が岩下という姓です。一番若い方で45～6才で今だに人が亡くなると、サンゴのかけらを集めて来て風葬にし、うえを石で

かこみ、5～6年から7～8年たって完全に骨になった状態でもう一度、骨を拾って来てお墓に入れる風葬がそのまま残っている所です。

亜石島は宝列島の中では珍らしく住民の方が産業としてとび魚の漁業をしており、諏訪之瀬島はヤマハが開発してしまして、ヤマハの飛行場等もあるのですが、家の戸数が全部で10戸、恐らく日本人の住んでいる最南端の活火山の島ではないかと思えます。

すごい地鳴りが続き、島中全体黒い火山灰におゝわれ、諏訪之瀬島を出航して次の中の島にむかう時には、カヌーの左半分が火山灰で真黒になっていました。次の中の島は、たった一人のおまわりさんがいられる島ですが、これも活火山の島です。最後の口之島で宝列島ではじめてアイスクャンデーを食べました。どうして生活しているかと云うと、鹿児島県の十島村になっており、十島丸という船が1週間に1度、鹿児島島を出航し、島を順番にまわっています。島ではナンバープレートのついていない廃車寸前の車から島の人達に委託して生産している牛、トイレトペーパーから食料品にいたるまで総てこの船に頼っているわけです。

接岸出来ない島が三つあり、手こぎの船で出掛け、沖合に止っている船まで行き物資を乗せて帰るといった方法がとられています。

衣料品や趣好品が欲しくなると船のパーカーに細かく注文して頼みます。家庭用の冷蔵庫は置いていられるのですが営業用の冷蔵庫はどこにもないものですから、アイスクャンデーを食べられるのは一番鹿児島島に近い口之島しかないということになるのです。

米の南から北への渡来というとらえ方をしていましたが、あきらかに自分で航海してみて、奄美大島から宝列島経由という型は恐らくなかったと思えます。

沖縄から鹿児島島の山川港への航路は、1年に3日位、奄美大島の鼻先をかすめるように走れたと言われてはいますが、いずれにしても宝列島は無視して考えてよいのではないかと自分なりに考えています。

以後、質問に答えて

問 1. 出発迄の準備、手続は？

答 手続に関しては、こちらで前もって航海に関する計画書を作製し、海上保安庁に提出しました。なまじっか提出したばかりに、海上保安庁に追いかけるられるということになってしまい、「さわがれず、自由に出航したかったのに」と申しますと「出さずにやってくれたらナー」と言われました。ヨットの場合、必然的に発光信号とか、落下傘つきの信号弾とか場所によって使えますが、今度の場合、完全防水の物を積みたかったのですが、例えば落下傘つき信号弾は船籍証明がないと売れないとか、トランシーバーに関して陸上で使っているトランシーバーは海上では発信してはならないとか、いろいろな規則があるのです。それにもかかわらず「どうしてトランシーバーを積んで来なかったのか」と海上保安庁の方に言われ、こちらにしたら最大限にしたはずが、海上保安庁にもたてまえ論と本音論があったようです。装備に関しては、普通に手に入るものしか積んで行きませんでした。

問 2. 計画の期間は？

答 約1年半位。

問 3. 何日もとじこめられた時、何日位で2人の関係がしんどくなりました？

答 3日か4日位です。

問 4. 共通の話題は？

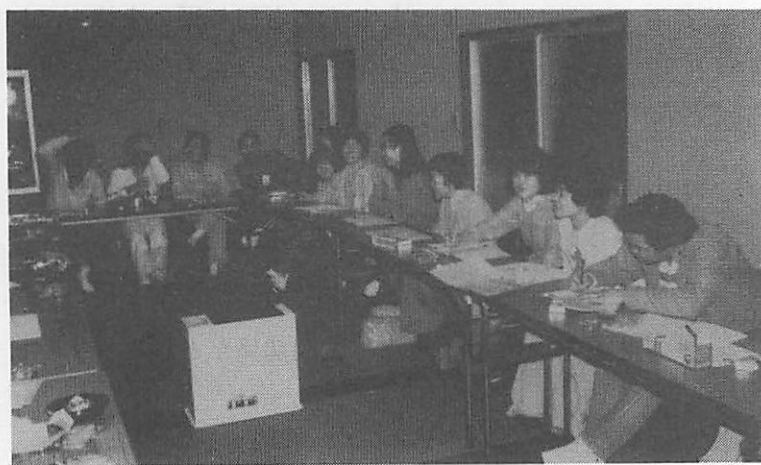
答 どちらも物は言わなくても、一番待っているのは天候の回復してくれることです。しゃべりはしなくても同じ願いを持っているからこそ、あまりしゃべらなくても済んだのではないかという気がするのです。

問 5. 2人でないとだめだったのでしょうか？

答 実際問題、2人乗りの船でないと1人乗りの船では装具が積みませんし、2人乗りの船を1人でこぐのは不可能に近いことです。2人の苦痛を実際に体験してしまいますと、次にもしやるならば、1人でやりたいと思います。2人というのは最悪の人間関係だと思います。

バズセッションより

話し合いのポイント
意見とアドバイス
疑問点とその解答



I 青少年活動におけるリーダーの問題

A・A' グループ

望ましいリーダーのあり方（条件）

A 青年を対象としたリーダー

1. 人格に関して

- a ワンマンであってはならない。みんなの意見をよく聞く人格のお
よらかな人が望ましい。
- b 何事においても決断が出来る人。
- c 先頭にたって卒先して動く。

2. 会議運営に関して

- a 会に参加した人は、一人一人が何か意見を言うように会を運ぶ。
- b 一つの反対意見があっても見捨てずにとりあげる。

3. 組織運営に関して

- a 全員に適材適所の役を与えることによって、一人一人が満足感を
得られるように配慮する。

4. 活動計画

- a 行事を行う時に、何のためにするのか目的意識をはっきりさせる。
- b 大きな行事をすることによって団結につながると思う。

B 少年を対象としたリーダー（小3～高校生位）

1. 子どもを導く立場でボス的なリーダーよりも、みんなと仲間になっ
て、その中でリードしていくような姿が望ましい。
2. リーダーは子どもの憧れであり、子ども達にしたわれる人でありた
い。その為には模範的であることが望ましい。
3. 多種多様のリーダーが集ってグループを構成するのが望ましい。
4. 子どもが興味を持つようなプログラムの作製も必要である。
5. 活動している子どもが、今、何をしているかをよく把握する。
6. 子どもからしたわれるような、人間関係の大切さをよく考える。

7. 子どもの好きな人は、子どももリーダーを好きになる。子どもの嫌いな人は他所で活躍する方がよい。

リーダーとしての悩み

1. 子どもが大きくなっても、地域に定住しないので、リーダーになる人が少く人材不足である。
2. 活動に子どもを参加させると、父兄はまかせっぱなしが多い。
3. 子どもが自主的に計画をたてた場合、危険度はどうするかがむづかしい。
4. 対象とする子どもが大きくなるほどむづかしい。リーダーとの年齢差が近いとやりにくいのではないか。
5. 高校生には遊びが一杯ある。活動の中に入れるには、レベルの高い興味のあるものでないとひきつけられない。

リーダーの基本的な条件整備

1. リーダーが充分、自分の力を出せる場を作る。
2. 継続的プログラムの中で、リーダーの心得をつくるようなものを考える。
3. 自信過剰にならない程度に基本的、とり組姿勢を心がける。
4. グループを考え、まとめる力を養う。
5. リーダーにも先頭に立つ人、バックアップする人の2通りがある。
6. リーダーのやりすぎにより、グループから浮くことのないように。
7. 自分のやめた時の事も考える。

A・A' グループに対する意見とアドバイス

1. リーダーの人格については、二次的要因であっても、一次的要因ではない。内向性の人、ワンマンの人でもリーダーになる素養はあり得る。
2. 子どもの嫌いな人は、少年活動から離れるのではなく、役割を考え参加するのが望ましい。
3. プログラムの危険度はケースバイケースであるが、危険と思われる

ものは最小限にとどめ、安全性を高くしたい。

4. ロータリーの立場から言っても、人間関係を尊重する事が第一である。

- (1) 真実かどうか。
- (2) みんなに公平か。
- (3) 好意と友情を深めるか。
- (4) みんなのためになるかどうか。

ロータリーには上記のような、四つのテストというのがあり、自分の言動はこれに照らし合わせるが、青少年活動にも同じことが言えるのではないだろうか。

B・B' グループ

1. リーダー自身が活動を通して自分も成長してゆくリーダーでありたい。
2. リーダーとして技術的な面を身につけると共に、思考力や創造する力をも身につけたい。
3. 誰れでもリーダーになれる要素は持っているが、夫々の個性をいかしたリーダーでありたい。
4. 常に謙虚でありたい。
5. 空論ではなく、実践を通じてやってゆきたい。
6. メンバーと友達になりたい。
7. 悪いことは悪いと言えるリーダーでありたい。
8. 子ども達と常に一諸にやってゆく気持ちを持ち、継続してゆく地道な活動を続けたい。
9. 次のリーダーを育て、ゆきたい。

B・B' グループに対する意見とアドバイス

1. 悪いことは悪いと言えるリーダーでなくてはならないと思うが、それが何故悪いのかを納得させる説明をしてあげる事が大切と思う。

C・C' グループ

ボランティア活動への入り方の問題

1. みんなが楽しくボランティア活動をやりたい。誰れでも入りやすい雰囲気をつくるのが大切と思う。
2. 遊びの中からまとまりをつけてゆく。まとまりの中でボランティア活動の意義を知る。
3. 奉仕とか、ボランティアを前面に押しつけない。

リーダーとしての子供に対する態度

1. リーダーと言うより、子どもの仲間として子どもに接してゆきたい。
2. 学校や家庭で教えられないものを子ども達に身につけさせたい。
親孝行を子どもに教えるのも大切と思う。
3. 子どもの背景を知るために家庭訪問も行いたい。
4. リーダー同志の対話をする機会を作りたい。
同じ地域にある各団体のリーダーとも連絡を密にしたい。

C・C' グループに対する意見とアドバイス

1. リーダーはグループの楽しませ役ではなく、自分の信念のもとにするものであると思う。その中に共に喜びあうものが生じると思う。
2. 親孝行も大切であるが、現代の子どもは物を大切にしない。そういったことも留意したい。

II ロータリーに関して、RYLAに関して質問と意見

A・A' グループ

1. 或る市では、ロータリークラブが球技大会や青少年祭り等に経済的援助をしているが、他の市ではないところもある。ロータリークラブという名前だけは知っていても、どんなものか内容は一般には分らない。もっと広報活動が必要と思うし、実践も必要ではないか。

2. 行政機関とロータリーとお互いに利用し、利用されるとよいと思う。
3. ロータリークラブとライオンズクラブとは関係があるのだろうか。

解 答

1. ロータリークラブはクラブによって活動が様々であり、独自のものであるから他市とくらべる事は出来ない。
2. 行政とロータリーとの共同活動というと、金銭的援助が求められることが多いが、ロータリーは補助金を出す機関ではない。
3. ライオンズクラブとロータリークラブは全然関係ないが、どちらも世の中を少しでも明るくしようという考え方は一致している。唯、奉仕のやり方、奉仕に対する根本的考え方が全く異っている。身近な例をあげると、たばこのすいがらをなくし、社会を美しくするという事に対して

A すいがらをひろって美しくする（労力奉仕）

B かみくずかごを贈る（金銭奉仕）

Bがライオンズのやり方であり、ロータリーはA、Bのいずれでもなく、たばこのすいがらを捨てない人を育てるとというのが本質的な考え方である。単的な例で判るように、ライオンズクラブはクラブ単位で団体として主に金銭奉仕を行うが、ロータリーは原則として個人が奉仕するものであり、例会において、お互いに切磋琢磨し、ロータリアン自身が社会に帰って奉仕するものであり（個人奉仕）、ロータリークラブの名前で奉仕（団体奉仕）を行うものではない。

B・B' グループ

1. 青少年活動の資金の援助をしてほしい。
2. ロータリーの広報活動をしてほしいと思う。
3. ロータリークラブというと、やはり選ばれた人という感じが強い。
4. R Y L Aの回数や、人数を考えてほしい。又複数の地域ですることもしよいのではないか。ゲームやうたの指導なども入れてほしい。

5. R Y L Aに参加した経験を、いろんな人に伝えたい。参加費を自分達で負担する気持はあるが、どうだろうか。

解 答

1. ロータリーは、金銭による奉仕に使命を持っていない。クラブとしても、限りある資金をどのニーズに必要か、その時によって協議するので、同じ活動のために、継続して資金を使うとは限らない。
2. 奉仕の本来の姿は、奉仕したことをいたづらに発表するものではなく、むしろそれは奉仕ではあり得ないと思う。ロータリーは奉仕の為のクラブとしての財源は少いが、ロータリアン夫々の個人としての奉仕は大きいと思う。唯それを一人一人がとりたてゝ言わないだけである。
3. 1905年にポールハリスがロータリーを作るために集った時のメンバーは、決してエリートの集りではなかった。基本的には良質な心を持った成年男子で構成されるが、ロータリーの奉仕哲学がたまたま企業経営哲学に合致することから、経営者がメンバーになることが多くなったものと考えられる。
4. R Y L A参加を2回までと制限したのは、同じ人が何回も参加することは公平をきすところからである。しかし卒業生に対するアドバンスコースも考えている段階です。

参加人数については、余島の収容能力はこの人数で精一杯である。余島はR Y L Aにとって大変適した場所であると思う。兵庫と四国と両方に分れて実施することも可能ではあるが、両方が一緒にする意義は大きいと思う。

歌やゲームの指導を直接のプログラムにあえて入れていないのは、そういうことは夫々の団体によって修得していただける人々の集りということを前程とし、このR Y L Aセミナーは技術よりも心の問題を大切にしたいという基本的な考えからである。

5. R Y L Aは現在まだ育ちつつある段階であり、各クラブ単位の数少い

奉仕の一つである。昨年篠山において第1回RYLAの参加者が中心となって、篠山RYLAとも言える郷土を考える会が行われ、大変成功であった。将来このように各地RYLAに発展してほしいと願い、このセミナーがさし水の役割であればよいと思う。

C・C' グループ

1. ロータリアンが夫々の地域にもどった時、ボランティアリーダーが活動している様子をよく伝えてほしい。

身障者のキャンプや、リーダーの養成等について行政方面のみではなく、ロータリーの組織からも動いてほしい。

2. RYLAについて

地方においては、講師を得る事は大変むづかしい。こういったセミナーを企画した場合、ロータリークラブが講師の紹介などをお願いしたい。セミナーの中でHaW to は別になくともよい。スケジュールを決めなくとも、ゲームや歌等は、自由に出来ると思う。

このセミナーに参加させてもらったロータリークラブに対しては、次のよい参加者を紹介することにより感謝の気持ちを表したいし、講師の先生に対しては、今後の自分達の働きによってお礼がしたい。

RYLAセミナーの参加者は食費ぐらいは負担したらどうかと思う。

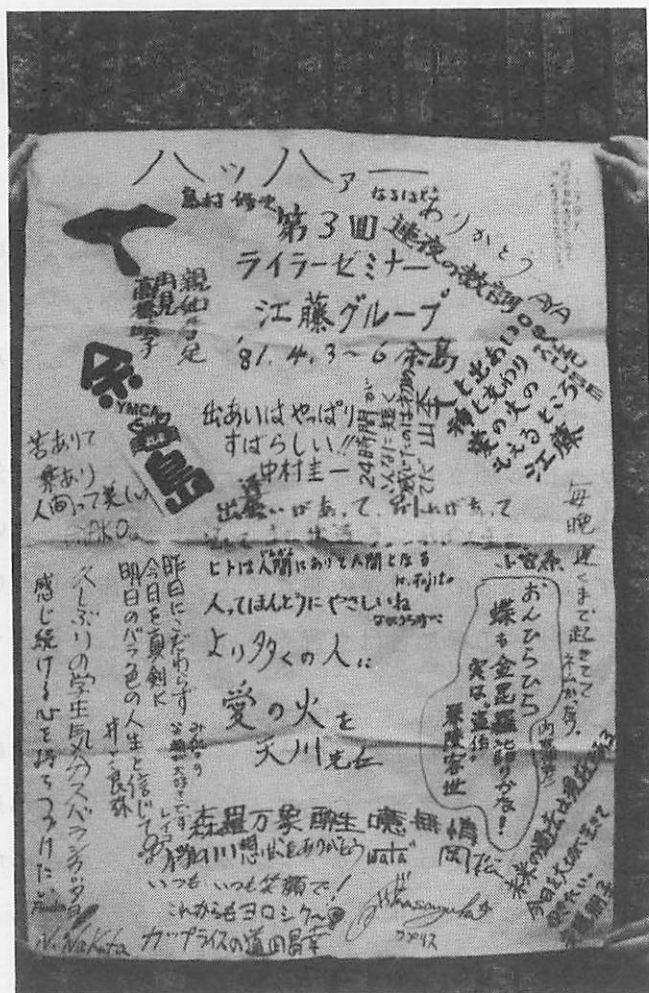
解 答

1. ロータリークラブは、特定の政党と結びついたり、行政に関与しない。ロータリアン個人が夫々立派になることによって、社会が理解してくれることであると思う。又ロータリアン夫々の意見をまとめないのが、クラブの本質である。ロータリーの組織による働きかけというのもロータリアン夫々に帰するものであると思う。
2. 昨年行われた篠山RYLAには、講師として今井先生や山村さんが行かれたように、ロータリアンの中にも多くの講師が居られると思う。
参加費については前述の通りである。

参加者感想文

A・A'グループ

マーマー・ウ・ウ



カウンセラー

江 藤 一 明

第3回ライラーセミナーで皆様と一緒に過ごした3泊4日は、本当に素晴らしい人生の一駒の時でありました。皆様お元気で夫々の立場で頑張っておられることと思います。

4月5日深夜に書いた寄せ書きを披露します。どんなこととお書きになったか憶えていますか？ 順序不同はお許し下さい。

出あいはやっぱりすばらしい!! 中村圭一 24時間がこんなに短く感じたのは初めてだ 山本 連夜の教訓 OSAMU KUSE なるほどネ
ありがとう AYA 親如手足再見 高橋晴子 おんひらひら蝶も金
昆羅詣りかな 琴陵容世 人は人間にありて人間となる 藤士圭三
人ってほんとうにやさしいネ ながうちけいこ より多くの人に愛い日
を 天川克二 毎晩遅くまで起きて、ネムかったワ 内藤伸彦
未末の過去は現在である今日を大切に生きて行きたい 安随朋子
森羅万象酔生噫無情 岡松 本当にいい想出をありがとう Wata
いつもいつも笑顔で! これからもヨロシクー カップライスの道田昌幸
みんなの笑顔が大好きですレイコ 昨日にこだわらず今日を真剣に明日
のバラ色の人生を信じて 井上良弥 内海の白砂青松下にみてみんなで
学ぶたのしいライラ 大垣健夫 久しぶりの学生気分スバラシカッタヨ
N. Nakata 感じ続ける心を持ちつづけたい Fumiko 出逢
いがあって別れがあってそしてまた出逢うこれが人生だ 小笠原

私は今寄せ書きを見乍ら皆様を思い出しています。いろいろ各自が感じ、それで皆様はロータリーを認識していただき、ロータリーの心をリーダーとして各団体に発揮して居られることを信じています。8月に淡路島で再会出来ることを期待しています。頑張ってください。

カウンセラー

琴 陵 容 世

過日の第三回ライラセミナー参加の折には、皆様方には大変お世話になりました。本当に有難く、先ずもって御礼申し上げます。

ところで、カウンセラーとしての感想文を、ということですが、実はあの時、私はロータリーアンでありながら役員の方に無理をいって、一人の受講生として参加させていただいたのです。

今回のような趣旨のセミナーに参加するのは初めてで、しかも、ロータリー歴も浅い若輩の故もあって、とてもカウンセラーなど勤まるはずもない、というのがその理由でした。

そういう訳ですから、私の、受講生としての率直な感想を述べさせていただくということでお許し願いたいと思います。

初めて顔を合わす、女性も含めた青少年指導者達がキャビンのひとつ屋根の下で寝食を共にする生活やキャンプファイヤー時の寸劇の競演などの楽しい催しは、大いに“好意と友情を深める”ことができたと思います。

更に、ゲストの先生方の講演はもちろんのこと、今井ガバナーを始め関係ロータリーアンの話される、実に味わい深い御言葉を拝聴して、開講式の冒頭だったか、深川ディーンが言われたように、このライラセミナーなるものが確かに濃密なハイレベルのセミナーであることを実感したものです。

このように品格があり、次代を担う青少年を育成するという重要な使命感を持つ有意義なセミナーのカウンセラー役を勤めるロータリーアンは、豊富な人生経験と奥行き深い学識を合わせ備えた立派な“人格者”でなければならぬと痛感した次第です。

私もこれからは、この“高い峰”を目指す努力をしてゆきたいと思っています。

ライラセミナーに参加して

藤 士 圭 三（香川）

ロータリークラブ主催のライラセミナーにはじめて参加しました。

4月のはじめ、どんな人が集まるのだろうかと思いながら、高松駅前時計台のそばに出向きました。

高松駅前に集まってきた四国4県の若者たちは緊張気味でした。点呼をうけて船上へ、…小豆島余島、それは本当に美しい、小さな島でした。ほどなくしてY M C A 野外活動センターのコテージにおちつきました。私の割り当てられたコテージには数名の若者がいました。

セミナーのスケジュールに従って会はずすめられました。オープニングセレモニーにつづいてキャビンタイムで江藤カウンセラーを知りました。江藤カウンセラーは、徳島県から参加されていましたが、以前からロータリーの主旨に賛同されているらしく、ライラのためにも、前日から参加され、いろいろとお世話して下さっていたようです。私は幸いにも江藤カウンセラーと一緒にグループに入れてもらいました。江藤カウンセラーを中心としたA A' グループは25名の若者たちでした。

はじめはグループの雰囲気は堅く、何となく他人行儀でした。しかし江藤カウンセラーのユーモラスな言葉に堅かった雰囲気も一気にやわらいできました。自己紹介をしたり、それぞれの意見を出し合ったり、夜の深まるのも忘れるほどでした。

ライラセミナーの計画は午前中は講義で、午後から夜にかけて行事や話し合いです。二回目、三回目と経過するにつれて、夜の話し合いの密度はいやがうえにもその濃さを増し、もうコテージが割れそうな勢いでした。今メンバーの青年たちを一人一人思い出すとき、本当にすばらしい青年たちとの出会いだったと心ゆかしく思い出されます。なかなかの芸達者な若者もいたし、本当に多彩な若者たちでした。多彩で心ゆたかな人たちの間で、心ゆくまで幸せでした。

(セミナー当日に)

Assistant counselor として RYLA セミナーに参加し、その時、その場で生きようとして努力している多くの人たちに出会いました。

「Aさんが私に話しかけてきました。sensitivity training って何ですか。」

「私は思いました。Aさんは概念を求めているのか、それとも私とのかかわりを求めているのかと、……」

「私はかかわりを求めました。それが好きだから。」

Aさんは涙しました。

Aさんは歌から離れ、人から離れ、自己を見つめました。

Aさんは、しばしの充実を感じたのです。そして私はそれを共に感じるよろこびにひたりました。

ひとつのうれしく、そして重い出会いでした。

第3回ライラセミナーに参加して

久 瀬 修

余島に来島した時、つぼみだったさくらの花が今や花びらとなりました。ライラセミナーに参加してよかったなあと思います！

リーダーとしての「考え方」「あり方」「行動」を部屋の中で話し合い、グループの中で発言し、それに対しての発言がまたとびかう、時間をわすれ、バズセッションに打ち込んで、気のついた時は、もうあたりは一日の終わりをつげるかのように暗にふけていた。

今、静かにまぶたをとじると、大スクリーンに写し出される一コマ一コマ、その中で一番目にやきついているものは、グループごとに行なった寸劇である。

少い時間で“台本”“小道具”を作り各自みごとにやりとげた。

たまらない喜びが心の底からこみあげ、血管を走り、頭の上からつま先まであつくておさまらないのである。

その日の夜は、ねむらなかつた。いやねむれなかつたのです。グループ全員の27人を8畳1部屋につめこんで“語り合い”“ねらい合い”“歌い合い”時のすぎゆくまゝにさわぎたてました。この経験は忘れることの出来ないリーダーとしての一步であろう。

山本清文

．．．
最大限の3泊4日、大変短かく充実した期間でした。どんなことでも吸収してやろうという気持ちで参加したライラでしたが、余島は私を決して退屈にはさせなかつた。

第1にロータリークラブを再認識できたこと、奉仕のために時間を捧げるという意味を確認できたことである。

第2に、自分を、仲間を、社会を、愛を見つめることができたこと。

第3に、多くの見知らぬ仲間たちと親睦を深めることができたこと、また、その仲間たちとひとつのものを成功させるという喜びが得られたこと。

本当にありがとうございました。

おもしろいものだ。つい3日前の余島への船上は、しゃべる言葉も少く、少々不安であったのに、もうこんなに……。

こんなにすばらしいセミナーを企画下さいましたロータリークラブの皆さんに感謝致します。私の町にも小さいけれど火は燃え続けると思います。

小笠原 茂

今回のセミナーで多種多様な活動をしてきたLeaderたちと出会い、討論できたことは、違った分野への疑問を解消してくれるものでした。また、あらゆる場合についてのLeader shipのとり方が少しだけわかつたつもりです。

違った収穫もたくさんありました。その一つとして今回やっとRotaryのことがわかつたことです。“錢持ちの集団=Rotary”ではなく、“奉仕する人

間を育てようとしている団体 = Rotary ”であるということです。これは、これからのクラブ活動をしてゆく上での考え方を大きく変えてしまうことであるものです。Rotaryに育てられているRotaracterとして、そして、人間としてあたりまえの奉仕ができるようになってゆきたいものです。

今回のセミナーの最も大きな収穫は、RYLAによって新しい友に出会えたこと、友情が芽ばえ始めたことでした。

友との再会を今から楽しみにしています。

岡 松 宏 明

大学を卒業して以来、机に向かって長い講義を聞いたり、同じ年代の人々と議論する機会のほとんど無かった私にとって、この四日間は有意義な事を数多く発見した貴重な期間でした。

このセミナーの最も重要な点は、青少年活動という共通の目的を持ちさまざまな分野で活動している人が集まり、互の経験を話すことによりヨコのつながりを深めることができたということです。

小さな町の青年団、あるいは県下唯一のインターアクトクラブといったように孤立した団体を運営している者にとっては、ある問題に対してどう対処すれば最良の結果を生むのかということがわからない場合があります。そういった問題がそれぞれの職場・学校・行政機関といったタテの関係だけではなかなか解決できない。やはり、こういったセミナーでさまざまな人の話を聞き、自分の経験を語ることによって、何らかの解決の糸口が見つかるのではないかと思います。

最後に、真心こめて御世話下さったロータリーの方々、ボランティアの方々に心から感謝したいと思います。

児 島 則 行

様々な活動をしている者が集まってきて自分の意見・主張を出し、認め合っ
てセミナーを有意義なものにしていった。

この出会いを大切に、これからの活動に役立てていこうと思う。

和 田 徹

ロータリークラブも何も知らずに先輩の代理として実技的な面の指導を期待
して今回のライラセミナーに参加しました。

最初プログラムを見て自分の期待していた実技的な面の指導が受けられない
と知った時は残念に思いましたが、よく考えてみると自ら進んで勉強しようと
するものにとってこれ程すばらしいプログラムはないと思いました。

それは、キャビンごとの討論会、自由時間等、どれをとってみても自分がそ
の気になって人と人との間にとびこんでいけばそのふれあいの中で自分にはな
いすばらしいものがいくらかでも吸収できるということです。だからいつまでも
このプログラムの基本的なものは変えないでいただきたいと思います。

最後になって思うのは本当に良い友達ができたという事と、もう少しみんな
と一諸にいたいということです。

今回の研修が終了するにあたってこういう機会をあたえてくださった方と、
心の奥に決して崩れることのない思い出を築いてくれたみんなに感謝していま
す。本当にありがとう。

それでは 永遠の友情を誓って……！

RYLAセミナーに参加して

井 上 良 弥

RYLAセミナーに参加して、諸先生方、又、講師の方々の話しはもとより、

知らない者同志の交流が計れ、4日間の短い時間ではありましたが、カウンセラー、アシスタント、参加者からいろいろと教わったり、話し合ったことが今一番印象に残っており、私にとって今回のRYLAの成果であった様に思います。

我々、青少年活動にたずさわっている者にとって、奉仕という精神の原点、意味を再確認され、我々がやっていかなければならないという、やる気を再び起こさせられた様な気がしました。

そして、リーダーとしてのむずかしさ、つらさ、又喜び、幸わせを共に知り、学んできたと思います。

バズセッションの時間が少なかったのが非常に残念です。ここで得た色々な教訓を生かし、地域に持ち帰り、微力ながら所属団体、地域活動に役立てたいと思っております。

最後に私ももう一度参加したいと思っておりますので、どうぞこの様なセミナーをずっと続けていただき、青少年の健全育成の為に魅力あるセミナーにして下さい。

第三回ライラセミナーに参加して

道田昌幸

どんなに願っても自分の側にとどめてはおけないもの……。この四日間は私にとって、その様に感じました。

見ず知らずのさまざまな人間達が集まり、やがて心に灯がとまり、いつしか離れられない絆で強く結ばれる。誰一人として自分をPRするプラカードはかかけていない。しかし何かに向けて燃え様とする共通の気持が知らず知らずのうちに仲間を作って行く……。

そして又、自分達の地域の活動における悩み・問題・グチをお互いにおちまける事によって今まで自分だけでごまかして出していた結論から脱皮する事が出来ました。それに素晴らしい講師の方々の興味深いお話しによって私の世界

がまた1歩広げられた様に想います。この様な充実した日々をこんなに輝いた自然の中で持たせて下さったロータリーの方々に心から感謝しています。地域に戻って必ず生かしてみせます。

でも……この素晴らしい人達・日々が'81年4月3～6日という泣いても笑っても二度と帰って来ない時間という真空パックであると言う事に気づいた今……とても、とても寂しいデス。

第3回ライラセミナーに参加して

大垣 健夫

この余島に渡るまでは、ライラの意図するところもわからず。期待と不安でいっぱいであった。

セミナーを終えようとしている今、先生方の素晴らしい講義や体験談、いろんな仲間達の活動報告を聞くことにより貴重な4日間となりました。ここで学んだことを生かせるよう自分の将来の展望を見つめ直していきたい。

島村 修次

このライラセミナーに参加して私が今一番大切なもの必要なものを学びとったような気がします。そしてこの素晴らしい自然の中で学べた事はほんとうに貴重な体験であります。

そしてこのセミナーに推薦し参加させてくれました地域のロータリーアンのかたがた、又セミナーのスタッフのみなさんに何とお礼をいっていいのか分かりません。みなさんありがとう！ グループのみなさんありがとう。

第3回ライラセミナーに参加して

内藤 伸彦

2週間前に辞令が来て『オイお前、「ライラセミナー」に行って来い。』と

言われて、「ライラ」って何か全然知らないまま何となく来てしまった。僕はボーイスカウト関係の仕事をしている時にこの種の講習会を何度か経験していたのでいつものように、「青少年とは、奉仕とはかくかくしかじかのものである……」というような形式のものをやるのちがうかと予想していた。案の定というべきか…… ホントは言ったらいけないかも知れないけれども午前中の時間はつまらなかった。ところが夜、それも午前0時を過ぎたころから雰囲気がかわってきた。

ボーイスカウトの人、青年団の人、先生 etc といったさまざまなグループの人から意見が出されはじめたからですが正直いって自分が属しているボーイスカウト関係者以外の立場の人からの「現場の声」を聞く機会をもったのはこれが初めてです。

余りに熱心な議論が続くので自分の意見を述べる機会を得られず、逐に猫を被ったまま、聞き手に終始してしまう結果になったけれども、誰かが自分と同じ考えを、どこかで必ず代弁してくれたので欲求不満はなかった。

自分にはこの時のセッションこそが、このセミナーでの最大の収穫と思えた。次にこのセミナーの運営について一言。なぜ3泊4日、実質丸3日間の生活費に¥30,000もかかるのでしょうか？ Boyスカウトのキャンプではほとんど1ヶ月近く生活できるだけの大金です。ユースホステルでも1泊¥2,500です。もっと経費を削減して、その浮いた金をより多くの人を招いたり、あるいは開講回数を増やしたりすることに費してほしい。

1日¥7,500の生活費はどう考えても常軌を失っていると思うのですがどうでしょうか？ 3日間の睡眠時間の総計が10時間30分で眠かったけれども、有意義な4日間を過ごさせて頂き、本当に有難うございました。

第3回ライラセミナーに参加して

中 村 圭 一

ライラセミナーとは、何をするのか、よく判らないまま、この余島にやって

きました。

まず施設の立派なのんびり、そして小さい島ながらも桜も咲くし、自然がいっぱい、いいところへ来たな、と思いました。

この思いは、時間を、日を重ねる内に、ますます胸中に満ちてきました。

判り良くお話しいただいた講演、ロータリアンの方々の献身的なご奉仕、仲間との出会いで生まれた友情、何もかもが心配を通りすぎて、今は充実感だけが残っています。大切に持って帰ります。

そして、これからの地域での活動に今以上に大いに役立てていきたいと思えます。

最後に、ロータリーとは雲の上にあるものと思っていましたが、以外にも我々のごく廻りにいてくれるものだとあらためて確認しました。

この成果も大きかったと思います。ありがとうございました。

中 田 昇

ここ余島での四日間、三人のすばらしい講師の方々の講演もさることながら、私にとって最もプラスになったことは、始め全然見ず知らずだった同志が今日に至っては何年来かの友人であるように思えることです。

それには同じ部屋で共に寝泊りしたということも手助けになっていると思いますが、やはり、キャンプファイヤーの寸劇で、あーでもない、こーでもないと考え、そして熱演したこと。

加えてバズセッションで熱っぽく意見を交えたこと、それによって生まれる連帯感、親近感によるところが大きかったように思われます。

しかしその仲間意識もお互いの積極的な働き掛け、自分の役割に対する責任感が大切だと思います。

その点、このRYLAセミナーは、私にとってそれらも含め、自分を磨き刺激を受けるという意味においてとてもスバラシイ機会でした。

四日間どうもお世話になりました。

天川克仁

近年、急速に文明の発達により、人間は自然から遠ざかり本来の人間のあるべき姿というものがうすらいでいこうとしている。でも、その中で余島には自然があり、ここにいると本来の人間の姿に返えることができ、精神的息ぬきができ、あすから生きぬくためのエネルギーが蓄積される思いがする。

ライラセミナーの4日間でいろいろな事を学ぶことができた。3講師による個性的な講演で知識を得ることができ、キャンプファイヤーでは、ファイヤーのやり方、私の知らないゲーム、スタンツ、寸劇などを身につけることができ、バズセッションでは個々の人たちのもっているリーダーの価値感を話し合うことにより、私の考えにない新たなリーダーの価値観・リーダーのあり方を知ることができました。

また、夜、江藤先生、藤士先生を囲んで夜が更けるまで語り合うことにより、見知らぬ者が心が打ち受け合い、以前から知っている友のような気がした。人間とは不思議なものだ。

最後に特に私の心に残ったことは、思索の時間、5人で生きがい、人間が生きていく上でのいろんな場面での選択のし方、結婚などについてお互いに討議し合ったことで自分の考え方の浅さを知ったことです。

追伸

次回、何のために思索という時間を持ったかを理解してもらい、少人数で、山で、浜辺でいろんな事について思索する時間を持ってもらいたいです。

続追伸

人間の歴史の中で自分の人生はほんの1コマである。だから短い人生、せかせか生きるのではなく、ゆとりを持って生きようではないか。

第3回ロータリーライラセミナーに参加して

高橋晴子

素晴らしい三泊四日のセミナーでした。

自然の中で、友と出逢うことが出来、心を開いて語りあうことが出来ました。講義の内容も実にレベルの高いものでしたし、今井ガバナーはじめ、お世話下さった方々の態度に学ぶ処が多かったように思います。

この感動を原動力にして今後も考え乍ら、自分の道を歩んでいきたいと考えています。

ロータリークラブへの認識を再確認したのも、私にとっては嬉しいことでした。（私はロータリークラブ事務局勤務です）

来年度のライラセミナーには是非、クラブから推薦出来る青年を送れるよう帰って報告したいと思います。

お世話になった皆様に心より、お礼を申し上げます。

長内 恵子

“よかったです！”の一語につきます。ほんとうにありがとうございました。人ってほんとうにすばらしいと改めて感じました。

いろいろな人のいろいろな話を聞き、何となく自分に気づいた様な気がします。“私だけじゃないんだ、苦しいのはみんな同じなんだ”と思った時涙が出てきてしまいました。

うまく具体的によく表現できませんが、“やろう、とにかく自分の思っていることをやってみよう”という気がわいてきたように思います。

ロータリアンの人達を始め、ほんとうに全ての人にやさしさと暖かさをいただきました。私の理論は“人間はみな善である”でした。これがほんとうにはっきり確信できました。

今までいろいろなキャンプとか合宿とかいろいろ感動し、人とも知りあいました。そのたびにいい思い出が残っています。でもいい思い出、それだけです。今度は、これから生きていく1つの光をもらった気分です。うまく言えません。でもほんとうに感激をして帰ることができます。帰るといふよりも“いってきます”という気分です。

ロータリークラブのすばらしさも主旨もほんの少しわかったような気がします。この感動を1人でも多くの人に思いやりと暖かさで少しずつ分けてあげていきたいと思います。素晴らしい出逢いをほんとうにありがとうございました。

藤川麗子

今、この最後の日となってある不安が、心のすみに宿りはじめました。世の中には、いろいろな人がいます。この希望の島から今日、私達は現実の世界へ送り出されます。そこには、ここで理解しあった仲間達のような人が何人いてくれるでしょう。送り出された私が、どれだけ力を注いであげられるでしょうか。人にはそれぞれ自分にあった役割があることを身にしみて学んだ今、リーダーのむずかしさ、すばらしさを知り、自分に向く役割ではないことも知り、さて自分の住む地域で、ここで会ったリーダー達のような人に会えるだろうか。確かに島での生活は心を豊かにしてくれました。しかし、悩みもたくさんなげかけてくれたのです。私の心のかばんには、多くの問題が、現実の世界へのみやげとしてつめこまれたのです。明日からは、答えをみつけるのに必死になるかもしれません。でもこれからは理解しあった仲間が、どこかにいます。電話線には愛が流れてくるでしょう。郵便屋さんは私にとって仲間からの愛を運ぶ人となるでしょう。今度は、できるだけたくさんの答えをみやげに多くの先生方のあたたかい手の中に帰って来たいと思います。

みなさん、ありがとうございました。

第3回ライラセミナーに参加して

安随朋子

ロータリーとは何か、またロータリークラブにはどんな人が集まり、どんな目的で何をやっているのか、ということは今まで全く知らなかったし、また兵庫、四国4県の全く見ず知らずの人達の集まりの中でのこのセミナーへの参加

は、はじめはとても不安でした。

もともと、私は今まであまり積極的にこのような場に参加したことはなく、人に参加しろと言われればするけれど、参加しなくても済むようだったら、済ましてしまうというような、「波風の立たない平凡な毎日が送ればいい」というような考え方をしていました。だからほんとうはこのライラセミナーも、そんなに楽しみにして来たのでもなかったのです。

しかし、興味深い講演やキャンプファイヤー、キャビンでの友との語り、また、すばらしいロータリアンの方々のお話を聞いたりしているうちに、ふだん忘れていた人生とは、人間とは何だろう？どうすれば私たちの社会が明るく良くなるだろうというようなことを考えさせられました。

このライラで学んだいろんなことを、これからの人生で何度も思い返し、考え、青少年の指導者として立派に社会の役に立てようがんばってゆきたいと思います。

また、こんなにもすばらしいセミナーをもっともっと多くの仲間知ってもらい、参加してもらえよう、これからもずっと続けていってほしいと思います。

最後に、このセミナーの計画及びお世話をして下さったスタッフの皆さま方、どうもありがとうございました。

中 田 綾 子

今回のセミナーで何か、新しい自分を見つけ出そうと思い参加した私でした。ととても長く感じた4日間、それだけ充実した日々をおくれたんだと思います。一生かかっても会えないかもしれない人々と、このロータリーのセミナーの導きによってめぐり会えた。本当にすばらしいことだと思います。

私の青春の一時期に与えられた、大きな課題として、このセミナーはピッタリでした。自分の視野の狭さをつくづくと思い知らされ、人間と人間のつながりがなんてすばらしく美しいものか、なんていい人ばかりなんだろうかと思ひ

ました。

友と共に語りあかした夜、自分の意見を発表し、友の経験に耳を傾けて、涙をながしたあの時初めて出会った者同志には思えませんでした。

何て私は幸せな人間に生まれたのだろうかと思うと、すべての人々に感謝したくてたまりませんでした。その感謝の気持ちを一生忘れたくないと思います。

私は今の気持ちを人々の為に生かして、もっと人々の役にたちたいと思っています。

「働くとは、はたを楽にすることである」とてもすばらしい言葉だと思いませんか。私は、本当に人として生まれた事に大きなよろこびを与えられました。このよろこびをより多くの人々に知らせてもらえたらと思います。

みなさん、どうもありがとうございました。

普通の人の一としてライラに参加して

池 本 文

私は、フォーラムの時のB班代表の「ライラの参加人数を減らし、募集するメンバーの範囲をボランティアのリーダーにしぼってほしい」について、一言述べさせて頂きたいと思います。リーダーとしての資質を磨く、リーダーとしてのいろいろな勉強をするという目的以外に、ボランティア活動をしている、こういう人達がいるということ、普通の人々（それは、自分のことで手いっぱいだから、ととてもとても他人のことに手が回らないと思っている人々）に知らせ、そしてその人々を刺激するという、素晴らしい目的もあるのではないかと思います。たまたま混っているそういう人達、私も含めて、がいることによってボランティア活動の輪が広がるのではないのでしょうか。だから、このようなライラ参加者の構成は実に、それなりに有意義だと思います。ライラはまだ手探りだということですが、このような意見もあるということを手留めて頂きたいと思います。メンバーがしぼられていなかったからこそ、私は幸運に

も、このライラに参加できたのですから……。

最後に、私の今の心を表す言葉は……アリガトウ……です。

第3回ライラセミナーに参加して

北 添 文 子

私は昨年第2回RYLAセミナーに続き2度目の参加でした。そして昨年と同様に深い感銘をうけました。数日前までは見ず知らずであった人々の中で、自分を語り、相手の話に耳を傾けるプロセスで少しずつうちとけ、様々な人生観、物の考え方に触れられたことは大きな収穫でした。

また今回は、RYLAセミナーの主旨をより身近なものとして感じることができ、私がこのセミナーに参加していることの意味、参加者の役割、期待というものを認識することができました。

ロータリークラブが青少年育成に対してめざすもの（タバコの吸いがら入れをつくるか、それとも吸いがらを捨るかどちらをめざすかをあげ、そのどちらでもなくタバコの吸いがらを捨てないような人材をつくることをめざすという例からの示唆）に対して同感です。私たちがそれぞれの持ち場で、地味であるけれども活動し続けてゆくことが大切だと思います。

昨年も思ったことですが、感動した心を持ち続け、容易なことではないけれどそれを一步の行動につなげてゆきたいと思います。

最後にこのセミナー成功のためにつくされた方々すべてに感謝します。

P.s バズセッションの形式ですが、キャビンごとのほかにテーマ別の分科会形式にするのもおもしろいのではないかと思います。

。……さあさあのおさるが瓜等コトモトのころは
。さあ…… さいわいして……お言葉をお聞き心のやのほ、お言葉

B・B'グループ サマトラ回も楽

千文添非



電の甲れお思
強の弱の弱同
手、の指さ自分
式えまの許、劇
、お個个ま
のご地話、まづ
す編強まのま
べーりまーロ
のるうのまは
かまうまはする
（表示のるお所

。まの理さけ似大ゆまこ、ゆづれ解しゆ高まるはれ
作せのまおさるまごが器容、お強さ許お心まじ機編、おさあまごま。思まお神



。ままじ
祥代の版マ一

は
ら
り

第3回RYLAセミナー

=カウンセラーとしての感想=

カウンセラー
前田 和 穂

今年は天候に恵まれず、野外での講習や、レクリエーションが出来なかったのが残念でありましたが、何と云っても、雨の余島の美しかった事と、若い方々と再び行動を共に出来た事は良い思い出になりました。

比のRYLAの事業は若いリーダーの方々とは直接身体的に接し、心のふれあいが出来るという意味で、数多くのロータリーの事業の中では唯一のものでありますし、地域社会に対する奉仕で又、直接反応のある効果を得ていると思います。三泊四日と云う日程も、最大の燃焼点に達した時点で、各自又地方へ散って行くと云う最良の効果ある日程でもあります。

早速、B班の有志からは、7月11～12日に268地区と267地区の接点である淡路で同窓会をやろうと云う御案内を頂きました。又、篠山からは、青年団の招待を受けました。こうやって、実際にRYLAに参加した方は、後々まで何らかの形で結びつき、各地での影響力を持つと云う事は、何とすばらしい事でしょう。これから回を重ねる度に、こう云った善良な青年が数多く育って行く事は、これからの日本の社会をより良く育て上げて行く大きな力となる事でありましょう。

不幸にして、私は本年度を以てロータリークラブを去る事を決意しましたが、来年度のRYLAに参加出来なくなる事だけが残念でなりません。RYLAのこれからの発展を心から願って止みません。

カウンセラー
嘉 納 洋

不安と期待を交互にもって、桜の蕾む、瀬戸内の美しい小島に立たれてから数日、桜のほころびと共に皆様の心もほころび、様々な人との出会い、有意義な講義、新しい経験等々、来島の時とは全く異ったものを持って余島を後にさ

れた事でしょう。このライラセミナーの報告書が御手許に届く頃、あの春に得た大感激を、人それぞれに整理されて、たとえそれが小さな炎でもきっと心の糧になって燃えつゞけている事と思います。

老若男女、一面識もなかった人達が、一つのものに向ってエネルギーに進んで行く、こんな場はそれ程たやすく経験出来るものではありません。あの感激が一段落した今、静かにその経験を、次の仲間語りかけて下さい。

このライラセミナーも回を重ねて三回、いつも目的は同じでも、その回、その回によって雰囲気異なる不思議さ、楽しさ、そして恐ろしさ、若い方達と同様、カウンセラーの私も不安と期待でセミナーの開幕を迎えます。そしていつも感じるのは、与えるものゝ何と小さく、与えられるものゝ多さです。“教えたり教えられたり、与えたり与えられたり、そう云う関係の中で人間同志のつきあいは深まる”こんな言葉をどこかで聞きました。正にその通りです。人との出会いの素晴らしさを大切にしたいと思います。

いつもの事乍らこの信頼と友情の場を与えて下さったロータリーの方々、受講生の皆さん、そして蔭で力をかして下さった方々に、心からの感謝と共に、御元気で御活躍なさいます事を祈って居ります。

(Bグループの方々にこの紙上を御借りして、7月の淡路でのリュニオンの件、一週間日を間違っしてしまい御目にかゝれなかった事、大変残念で、心より御詫び致します。)

村 井 健 一

ほんとうに来て良かった。なにも知らずに来たのにこんなにすばらしい講演を聞き、友だちが多く出来ました。わずか3泊4日なのになぜか5年も10年もつき合ってきたかのように気軽に話ができ「他人はみんな友」ということばを身をもって感じました。先生がた、そして皆んなから得たものを少しでもボクなりにつたえていきたいと思ひます。

なにげなく、またちょっとしたことで他人がよろこんでくれたことを自分が

わすれずそれをエネルギー源にして自分をみがきあげて一生いろんなものにチャレンジして、なにかの役にたちたいと思います。そしてすばらしいリーダーになりたい。

すばらしいライラでした。

最後にお父さんお母さんお兄さん、皆さんありがとうございました。一生このことは忘れないようにしたいと思います。

常 陰 直 毅

私はこのセミナーに自主的に参加した理由ではなく、いわば親に半強制的に参加させられたのです。だから青少年指導者の育成と云うのがどの様なものか何もわからずに来ましたし、又私自身が奉仕活動に参加した経験もありません。この様な理由で、最初は不安と疑心暗鬼で一杯でしたが、来たからには何かして帰らなければ、自分にとって非常に損だと思い直して、何でも積極的に参加してやろうと思ったのです。

その結果、私の今迄の人生の中で最も有意義な経験の一つを得たと思います。様々なジャンルの人々と出会い、夜遅く迄色々な問題について真剣に討論し合うという、現在の白けた学生々活の中では忘れ去られていたものを思い出させてもらいました。そして私が改めて認識させられたことは、今迄の自分がどんなに狭い殻の中に閉じこもっていたかということと、それを正面切って認識することによって勇気さえ持てばその殻の外に出られる可能性が自分にも在ると云うことです。このことに気付いたのは、私にとって非常な喜びでした。これだけでも私がこのセミナーに参加した意義は十分に果たせたと思います。

その上に、これだけ多くの「友達」と一度に接することが出来たのは大変な幸運だったと思います。

有難とうRYLAセミナー！

私の出会った青少年のリーダー達は皆素晴らしい顔をしていました。とてもうらやましい次第です。この後すぐに私が青少年指導の世界に入ることは疑問視

されますが、先づ自分の生活を律し、身の回りの小さな思いやりだけは実行していきたいと思っています。

では皆さんと再び会えることを期待して Good - bye !

鵜久森 高 弘

この4日間が私にどのような影響を与えたかということは、現在においては、はっきりとわからない。ただ、自分は協調性、積極性に欠けているということを思いしらされた。

非常に楽しい雰囲気であったが、今ひとつ溶け込めなかった自分がはがゆい思いであった。

いつか、このセミナーが生きることがあるだろう。それまで鳥羽さんのような自分自身の信念、実行力をもてるようにがんばりたい。

佐久間 文 孝

中2日を雨に降られ予定の変更もあったが、4日間のセミナーを修了し、なんともいえない充実感がみちてきた。

正直に言って運営自体は多少徹底不足のところや連絡方法の不確立等問題点はあったが、それを捕ってあまりあるスタッフの一途な心意気が伝わってきた。

余島の自然もさることながら、さらに輝くロータリアンの精神にふれることができた。

日常青少年活動をやっている自分達ばかりどうしてこんなにやっているのに……とついグチのこぼしたくなる毎日であったが、今後とも結果を甘く期待することなく、しかし希望だけは高くかゝげてより一層の精進を続け、あとにつづく人達の目標となるよう一日一日を大切に活動をやっているという気力があふれてくる。

活動にまだかゝっていない人もあり、分野の違う活動の人あり、それぞれ

にやっていることは別々でも、最後にはつい涙を流して別れを惜しみ、感動に胸ふるわせる有意義なセミナーであった。

多く語りたい気もするが、みんなの感想を読めばそれぞれの気持ちはわかってくると思うので失礼します。

セミナーの今後の発展を祈ります。

次回の新しいメンバーとスタッフに、やはり「きてよかった」「ありがとう」といわれるセミナーにしてください。

勝野 哲也

今、私達に自然のすばらしさと友情の尊さを教えてくれた第3回ライラセミナーが終わろうとしています。私は、心の奥底から湧き起こってくる感動と満足感にひたりながら、この喜びを何らかの形に残すべく筆をとりました。

私がこのセミナーで得たものは3つあります。

その1つは、時間というものがいかに大切であるかを理解できたことです。3日間という期間は、寝ていてもすぐに過ぎてしまいます。遊びほうけていてもすぐに終わってしまいます。しかし、3日間を、このセミナーで送ったように有効に利用すれば、はるか四国の高知の人とも友達になれます。兵庫県の北のほうの人とも心が通じあいます。人の輪が、海を隔てて広がります。

このセミナーは、私に今までの私の時間の使い方を戒めてくれ、今後青春をいかに過ごしていくかの糧を与えてくれました。

2番目に、私はこのセミナーを通じて、人の若さというものはその人の年齢で判断するのではなく、その人の活動力でもって判断するのだということ、改めて認識することができました。そのことを立証してくれたのは、このセミナーに参加したリーダー、グループの仲間全員です。ここでは、年の差はあっても、若さは全員が同じように持っています。躍動する人間の美しさを見ることができました。

最後に、自分の意見を包みかくさず述べ、他の人と討論することは、自他を

通しての成長の根源であることが実証されたことです。

私は、「リーダーとしてのあり方を問う」というテーマの討論において次のような意見を述べました。「リーダーが10人いたとし、その10人がそれぞれ1つずつのグループをもって青少年指導にあたるとすれば、その目的にたどりつくプロセスは必ず10通りあるはずである。」ということです。則ち、リーダーは生徒達の模範であろうとするあまりに、自分の個性を殺してしまっはいけないということを述べたのです。

しかし、この意見は多くの人の反論をうけてしまいました。その人達は、「リーダーは、普段の生活から自分をおある程度殺し、人々の鏡になるような言動をしなければならない。」ということをお反論材料としてあげてきました。

私は自分の意見を絶対に譲りませんでしたが、相手も同じであったので、水かけ論となり、結着はつきませんでした。しかし私にとってこの討論は、非常に満足のおいくものでした。おそらく、相手も同じことを思ったはずです。

それは、たとえお互いに青少年を指導していくプロセスは異っていても、「子供達を愛し、彼らをお成長させる」という目的が1つであることのお確証を得ることができたからです。本当の討論を、ライラセミナーは私に教えてくれました。

この余島をお去るにあたって、私は、ライラセミナーに参加させて下さった、ロータリアンの方々に心より感謝し、明日からの日常活動において、それをお返ししていきたいと思います。

また、きっとこのメンバー全員が集まれることを祈って、筆をおきたいと思います。

木村謙児

見も知らぬ仲間との出会い。ネクタイ姿で参加した私は、既にきていた友の一杯のお茶で、ネクタイは勿論、シャツも胸も開けて、語り合いすぎた研修会。学生時代以上に真剣に討論をし、講義を聞き、遊びすぎたこの3泊4日の研修も、もうすぐ終わりです。少々甘酸っぱい涙と明日への闘志を共に誓い、きれめのない1つの輪（和）ができた事を解信しています。

“又、会おう”を合言葉に各々の地で、精一杯力強く運動を展開しましょう。
最後に、お父さん、お母さん、そして兄貴 ありがとう。
みんな ありがとう。

田 端 欣 也

私は思う。出会いとは、なんと不思議なものだろう。

神戸で帰っていたら、こんなすばらしい友との出会いはなかった。赤いジャンパーの若者、背広姿で現れた二人の男、初めは一杯のお茶から四人の心は少しずつ開かれていった。今まであまり他人に話したこともない自分のはじを、なんの抵抗もなく話していくのである。

人は社会において役割をもっているとおしえられた。私の役割とは精薄児との毎日である。苦しみ考えこむ日の多かった私の心の中に一本の光がさしたような気持である。

皆んな元気で また会う日まで！

B グループ 304号室

天 川 孝 夫

第3回ロータリーライラセミナーに参加するについて大きな問題がありました。それは4日間にわたって会社を休むことです。このことは高松西ロータリーの人々の口ぞえで、どうにか解決しました。

セミナーのスケジュールは、指導者の自主管理を前提として組まれていると聞いてこれでいいのかなと思いました。今思うには、こういった配慮がされているおかげでたくさんの人と話しができ、先生とみじかで親しく話しができました。そのおかげでロータリークラブがどういったクラブか解ってきました。そうすると私達とロータリークラブのこれからのつながりをどのようにもっていったらよいか解らなくなる面がでてきたのです。それをカウンセラーの人たちに聞くとロータリアンとのつながりをもっていくことだとアドバイスされました。それを聞いて目の前に光がさしたような気がしました。

このセミナーの友やロータリアン・カウンセラーの人たちとなんらかの機会を見つけてつながりをもっていきたいなと思っています。

第3回ライラセミナーに参加して

平 郡 平

一沫の不安と期待に満ち、はじめておとずれたこの地「余島」。

静かな環境、海、大自然、そして高度の講演、数多くの友との出会い、学び、思考し話し合い、長くも短かかったこの研修もはや終了しようとしています。インフォメーションセンター横の桜のつぼみも今は満開です。これが参加者一人一人の本当の気持ではないでしょうか。

私達青少年リーダーは、活動する場こそ違え、明日からは決意も新たに精一杯このライラの精神を生かした活動をはじめたいと思います。

最後になりましたが、こんなすばらしい体験を与えて下さいましたロータリークラブの皆さん、諸先生方、スタッフの皆さん、そしてこの地「余島」に深く感謝いたします。

ライラセミナーを終えて

谷 山 由 夫

「教師の視野の狭さ」という問題は、世間でよく取り沙汰される事であるが、私などは、元来の消極性に加えて他の職業人はもとより私立ゆえに他校教員とさえも交流がもてず最も視野の狭い教師ではなかったかと思う。従ってライラでの様々な職業、年齢の人々との出会いは、私にとってまさに驚きの連続であった。

「出会いの大切さ」についてはこれまで授業中に再三論じてきた私であったが、果たして私自身どれだけの出会いを経験してきたであろうか。また自ら求めてきたのか。私はここで自分が生徒に対して単なる「たてまえ論」をもてあそんできたに過ぎなかったという事に気がついたのである。

私がこのセミナーで得たものは、言葉で語り尽せないほど大きなものがある

と思うがひとつ参加以前にはなかった感情が芽ばえてきたという事がある。それは、自らリーダーになりたいという感情である。これから先もインターアクトクラブを見守っていく私であるが、その際、自らリーダーになりながら、次代のリーダーを養成していきたいと思うようになったのである。

またクラブに限らず、新学期の私の授業にも、この成果は必ず反映される事を確信する。これほど新学期を楽しみに思うのは初めての事であるが、この気持ちこそ私の中に見えない力が備わってきた事の裏付けではないかと私は考えている。

最後に、ライラ運営をお世話下さいました皆様、また私に対し多大な御援助を賜りました神戸須磨ロータリークラブの皆様にご心より御礼を申し上げます。有難うございました。

第三回ライラセミナーに参加して

豊田 耕三

4月としてははだ寒い日々がつづいて、さんねんながら雨の研修にはなりましたが、そのせいもあってグループのまとまりも早かったように思います。一つの班のメンバーが多かったので、全員の名まえを覚えるのはかなり時間がかかり、完全には顔と合いません。ニックネームで呼び合って、そちらの印象の方が強いようです。グループリーダーになった木村さんとその部屋仲間のおかげでこのBグループのまとまりは、すばらしいものになりまして、やはり、リーダーの人格(?)が、にじみ出たすばらしいものだと思います。

いろいろなサークルの現役リーダーの人たちもいれば、今までその経験のない人たちもいる。このセミナーの内容に全てのメンバーが理解できるとは思いませんが、Bグループの友だちはそれ以上のものがあつたのではないかと思います。

全員が地元に戻ってセミナーの成果をどう生かして行くかは、これからの一人一人の責任と義務であり、仲間と共に過ごしたこの四日間を忘れずに頑張つて行ってほしいし、私もこの経験を川之江の仲間知らせて、呼び名は違つて

も各地には、私たちの活動 V.Y.S と同じ活動が展開されているということを知らせたいと思っています。

そして、できるならば、再びこのグループのメンバーと逢って、よき友として、仲間として、共に勉強して行きたいと思います。

最後にこのすばらしいセミナーを展開して下さった、各ロータリークラブのライラの担当者の方と、私を送り出して下さった地元ロータリーの方々にお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

伊 藤 博 司

○新しく出来た友人たちについて

正直いって、本当に凄く偉い人というのが世の中には居るもんなんやなぁという感じがした。誰とはいいません。

○田中先生の講演について

頭に浮んだイメージ 青年意識の傾向、いろいろあるよいろいろね。過剰なやさしさ志向。それはいえると思う。

コミュニケーション大切に。やるときゃやるよ。口角泡を飛ばしての熱弁、凄い。

○増田先生の講演について

成程々々。ボランティアする人としない人の二分法など非常識。正解っ// 皆が出来る事を少しずつする。正解// 良くいるんです。「僕、ボランティアやってるんだもんね」なんて胸張ってサファリジャケットかなんか着て、ベルボトムのジーンズはいたりして PONY のスニーカーはいたりして「僕どことなく偉く見えるでしょ」という感じの人。そんな人がいるから奉仕活動がなにかうさん臭く見えてしまう。

Ordinary people がそれぞれの situation で奉仕すればいいのですよ。

いいことおっしゃるなぁ。感動っ// 増田先生にハクシュ ハクシュ。

○新野先生の講演 …… いまから聞きます。

○思索の時間について …… そもそも「思索せよ」「2時半までどっかって思索してこい」などといわれて、それで思索する、なんて、ただただタメイキ。「思索しちゃった」なんてちょっとね。

○鳥羽氏の冒険談について

男の子なら誰でも夢みる 胸躍るお話、楽しい。

○その他いろいろについて、印象に残った事。

鯛の活造り・風呂のせまさ・部屋の寒さ・みんなの元気さ・フォーラムの時の女の人の非常識さ・おしゃべり。 こんなところですかな。

増田先生のお話、タメになりました。

それから、えゝかげんな人間が書いたザレゴト、気にせんって下さい。

さようなら。

伊 藤 祐 市

ライラセミナーとは、いったい何で、どういうことをするか。まず最初に思い不安でいっぱいだった。しかし、同室の人たちに、話しかけ、自分のことを話すうちに友達になった。そしてそこで一番不思議に思ったのが性格がまったくちがう4人。ただ一つ共通していえることは、みんなバカになれることであった。そういう4人であったため、Bグループの中心的になってきた。4人中でリーダーと、それをもりあげるサブリーダー、物事を一步さがり、客観的に見る人間と、まだ何をするかわからない自分、それをほかの3人が引っ張りてきとうな役割をもらい自分ではそれなりに力いっぱいやったと思う。

それと講演は、余島に着いた次の日の田中先生の講演を聞いたとき、ガツンと頭をなぐられたような気持になった。そして次の日も、最後の日もセミナープログラムのすばらしさ、4日間に得た友達のすばらしさ、カウンセラーのあったかさ、すばらしさ、たいへん感動しとても勉強になりました。

セミナーを通して一番感じたことは人との出会い、人間の輪、人間のすばらしさ。

たった4日間でしたが、たいへんありがとうございました。

立 谷 林 也

分野は違っても、青少年の育成という一つの大きな共通の目的を持った各種青少年リーダーの悩みや体験談、又優れた講師の諸先生方によって青少年リーダーの歩むべき道というものを自分なりに見い出せたような気がし、今までになかったような充実感と、感謝の気持ちでいっぱいである。何か青少年リーダーとしての私を一回り大きくしてくださったような気もする。

又、当セミナーに参加するまで見ず知らずの者たちが集まって一つの目的をもち仲間意識を高め得たこのセミナーの特殊性のようなものも今までにあまり体験出来なかった数少ないことの一つである。

当セミナーに於いて、貴重体験と、友情は、長く私の体から離れないであろうと思う。

ライラ・セミナーに参加して

平 田 憲 一

私はこの3泊4日の研修で多くの友とめぐり会うことができた。ボーイ・スカウトの人、YMCA関係の方、青年団のリーダーの方等々。普段接する機会のないこれらの人々の様々な意見は青少年活動に対して多角的な視点を与えてくれた。と同時に私と大して年の違わないにもかかわらず、子供に対してとても深く考えている人が多かった事に、驚かされた。スタッフのみな様ごくろうさまでした。第4回のライラがさらに良いセミナーとなる事を願っております。この4日間で私たちの心に灯されたあかりを、絶やす事なく、地域でお互いがんばっていきたい。友と再び会う日を楽しみにしてペンを置きます。

能 智 栄 司

第三回ライラセミナーに出席するにあたって、とにかく4日間ボーとして講義を聞いていればよいという軽い気持ちで参加したのですが、参加して見ると

もう沢山のスケジュールでとても勉強になりました。

特にただ教授の講義を聞くというだけではなく、そんな中に自分で考える時間を多く持たせていただいたと言うことでなお多くの物が得られたような気がしています。

この4日間で学んだことをなるべく多くの人々にわけあたえていきたいと思っています。

最後にカウンセラーの諸先生に感謝して終わります。

第3回ロータリーライラセミナーに参加して

野々村 敏彦

私は、このロータリーライラセミナーに参加してとてもよかったと思っています。

なぜなら、技術面での進歩はなかったが、精神面での進歩が多であったと自分自身思っています。

私はこのセミナーに参加する面から精神面での進歩を期待して参加したしいですからよけいに為になったと思っています。

技術的な研修はいつでもどこでもできますが、精神面の研修をする機会が少ないので、今後もこのセミナーをつづけていていただきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

又、より多くの良き友が数多く出来たことは私の心の中に末長く残ることと思っています。

スタッフ・リーダー・講師の先生方4日間ごくろうさまでした。また次回もよろしく願いいたします。

後 聖 香

まずスタッフのみなさんごくろう様デス。そしてありがとうございました。今あたしは、ただただ感激で胸いっぱい、頭いっぱい、腹いっぱい！ ナンテ

3泊4日がこんなに短く感じられた事はありません。いろんな人たちと出逢えたこと、話しが出来たこと一生忘れません。こんなに充実した研修今まであったでしょうか。来島するまで“またいつもの研修みたいなんだナ”とわりと軽い気持ちでやって来ました。—初めて見た顔ぶれでぜんぜん知らない所の人達といっしょにこれからやるんだとハッスル！でもいつものある程度のこんなもんだと言う様なふんいきをずーと持ってたあたしだったのに—1日、1日過ぎてゆくにしたがってひとりひとりの性格、もろもろがわかって来ました。何を考えているのかまでわかる様になったのです。そして、なんておしえられる事が多いんだろう。こんなにステキな考え方があるんだろうといつもならきらいな講義が楽しく、バズなんかいいかげんなはずだったのがいつのまにか、必死でのめり込んで—、人にあげるものがあつたかどうかはわかりませんがどれだけ自分に得るものがあつたか、もう書くにたらず、しゃべるには1日かかってもたらないぐらいステキなものだったか……よくこんな人ばかりを集めましたネ！本当、お礼を言いたいぐらいです。お父さん、お母さん、お兄さんと、めぐまれた環境のもとに本当に4日間でしたけど育てられた私達は幸福です。そしていづれ巣立ってゆくんですよ。 “又同んなじメンバーで逢おうネ同窓会ぜったいしよう！お母さんの家にゆこうぜ！”を合言葉に最後の夜みんなの心がひとつになりました。小さな輪が大きな輪にぐーと広がったのです。これから！と言う時にサヨナラを言うのはとてもさびしくつらいことです。でも、神様がめぐり逢わしてくれた仲間達だから又いつかきっとみんなの顔を見ることが出来ると信じています。きっと……家に帰っても団体に行っても、当分ライラセミナーの話しに花が咲くと思います。何回、何十回しゃべっても本当のこの4日間のすばらしさはわからないと、わかってもらえないと思いますが、私はしゃべりつづけたいと思います。たしか2回まではこれるんですよ。きっと第4回も参加するゾとはりきってます。OBとしても—、その時はヨロシク。

さまざまな人に逢いました。本当に10人中10人もぜんぜんちがうんです。あたり前だと言われればそれまでですが、それぞれ個性の強い26人が顔合わせ、

ちゃんとうまくその個性を引き出し合い、ロータリーのシンボルマークの様に歯車がさからうことなく、確実に回り今もみだれる事なく回りつづけています。そして一生回しつづけてゆきたいと望んでいます。

ロータリーのみなさん、これからもステキなセミナー再会楽しみにしております。がんばって下さい。又いつかみなさんと逢える日を楽しみにこれからの毎日をここで学んだ事を、体験したことをいかし、これからのふみ台として行きたいと思っております。もう、私の思い、お礼はつきることはありません。まだまだ書きたいことがたくさんあるんですが、胸がつまって今にも涙がこぼれそうで書けそうにありません。この辺でピリオドを打ちたいと思います。一番年が下で(びっくりしてたけど)学ぶことが人よりもたくさんあったと思っておりますがみなさん、バカ笑いしては、すぐ泣いてアホを言った女の子、いつまでも忘れないでいて下さい。ステキなお父さん、お母さん、お兄さん、そして27人のみんな忘れることはないでしょうー サヨナラは言いません。

ありがとうございました。そしてごくろう様です …… ジャ。

I have never forget to you ……。

大谷朗栄

現在、しらけムードの無関心な若者が多いといわれています。しかし、ここに来て、私は接した方々が皆実に生き生きとし、積極的であるのに驚かされました。彼らの中には、無気力などという言葉はかけらもなく、彼らの中には、むしろ躍動的な魂の存在を感じることができたのです。魂の根源に潜む何かが、ゆすぶられる思いがいたしました。

彼らの多くは、青少年活動に何らかの関係を持っておりました。私はこうした活動に一度も関係したことがありませんでしたので、初めはその目的すら知らず理解しがたかったのです。しかしこうした活動をしておられる方々と話し合ってみて、生き方、及び人生について改めて考え直す機会を得ました。また自己中心であった自分自身を省みるのにも、とても良い機会を得たと思います。

こうした中で、私はとにかく自分と自分に近接した周囲だけの視野から、もっと拡大された所へ視野を広げる必要性を強く感じました。そして思い遣りのある慈愛に満ちた人間になりたいと思いました。

以上のように、このセミナーが私にとって、人生の大切な一点となったことはいふまでもありません。またいろいろな方々を自分の中に受け入れる柔和な観念を育成する上でもとても意義深い四日間であったと思います。きっと生涯忘れぬ思い出となることと思いました。

秋 田 直 子

何のめぐり合わせか知りませんが、参加出来た事とてもうれしく思っております。私は青少年活動やボランティア活動に参加しているわけではありませんでした。で、一体やってゆけるんだらうかと初日には思いましたが、友達のあたいかい友情にめぐまれて何とか無事に終了することができました。今、自覚することができている収穫だけでもたくさんあり、気づいていないことも含めればどれだけたくさんのもを学べたことか。本当に意義深いセミナーだったと思います。一番感銘を受けたのは諸先生方の講義でした。今、現代の我々がいかに生きべきなのかということ深く考えさせられました。私達はともすると、日常の日々の中に埋没してしまって、ただ単に生活していれば、何事もなく生活していればそれで満足してしまいがちです。時にはこのようなセミナーにも参加し、もう一度「自分」とか「人間」とかというようなものを考え直してみる事の重要性をしみじみと感じました。期待してきたよりももっと多くのものを得られたように思います。

ぜひぜひ、多くの方々に参加の機会を与え、これからもどんどん発展してゆく事を祈ってやみません。ありがとうございました。

浜 野 晴 代

頭の中には3泊4日のセミナーの中で色々な人と交わした会話とか場面が交

差して、思う事はあふれるばかりに一杯あるんですが、感激した事がありすぎて、言葉となって、文章として何も出てこないようです。本当に感激する事は数えられないくらいありましたし、ここに来ている人達個人個人の個性のすばらしさも感じる事ができました。偶然の本当に出会う事のないような人達が、10年来の友人同志のように話すことのできた「ライラ」のすばらしい雰囲気作りにも感激しました。講師の諸先生方の講義の中では、一言一句に感銘を受ける事ばかりで自分のいたらなさを鋭くつかれて身につまされるような言葉もありました。今迄にない充実した日々であったし、自分の中で吸収すべきものがあまりに多く、今は收拾が仲々つきません。来るまでは全然見ず知らずの所に見ず知らずの人達の中に行く事で不安も感じていました。しかし来てよかったと本当に思っていますし、ロータリーの方が推せんしてくださった事に大変感謝しています。ここで吸収させて頂いたものが今後の自分に大きな影響を与えてくれたように思います。そしてこの事を自分だけにとどまらず自分の周囲の人達に分けてあげられればとも思います。

ここ余島で私の周囲にいてくださったカウンセラーの前田のお父さんや加納のお母さん、それに鳥羽のお兄さまやすばらしいB班の人達から感じ取った何らかのすばらしいものを自分も持てればと思うし、おごる気持ちを持たずに人を思いやる事のすばらしさを本当に痛感しています。

今後は何事にも臆病にならずに好奇心旺盛でいつまでも有りたいと思いますし、感じた事、うれしい気持ちとか感謝の気持ちを素直に相手に照れたりすることなく出せるようになればとも思います。

頭の中であれこれ思い悩んだり、考えたりするだけでなく、まずは何かやってみよう、行動にうつして行こうと思っています。

中山 禎子

ありがとうございました。

別れはやっぱりたまらない。三日前は、全然知らない他人の関係。三日後は別れられない友達関係。素晴らしい四日間、素晴らしい仲間。素晴らしい両親、素晴

しいスタッフ、ほんまに幾度頭を下げてあかんように思うのです。

去年きた友達がライラ以後ほんとに素敵になったはずです。とにかく、“行ってこい、行ったらわかる”といったはずです。本当にいろんなことがあたしの中にあるのです。いいこともいっぱい、でも本当は今重く重くしい気持ち。友との別れ？ それもさることながら、それとはちがう、もうひとつとずんと重たいなにかがあたしの中にあるのです。

それはあたし、いろんなことを知りすぎたのです。そして自分の未熟さも知りすぎたのです。そのギャップがたまらないのです。

ひょっとすると、なやまなくてもいいなやみをいっぱいかかえこんだのかも知れない。知らずにいけば、それなりに暮らしていたのかも知れない。でも、もう知ってしまった。後には戻れない。でも前にあるものをみると、あたし足がすくんでしまっているのです。

二日前の朝までは、すがすがしい気持ちだったのです。楽しくて楽しくてああ、世の中にはこんな楽しいことがあるのかと思っていたのです。

すっかり別の人になってしまった、心が浄化されていたのです。自分でも素敵かななんて思ってたの。でもそのうちポロポロポロポロあたし、はげていったのです。そして、今までの自分がみえてきたのです。浄化された自分と現実の自分、そしてその開き。それを見せられた時、あたし、たまんなかった。これではいかん、これではいかんと思いつつ、どんどん、どんどん現実の自分が見えてくる。自分が小さくみえた。それに対して、まわりの人間がどんなに大きくみえたか、どんなにキラキラしているか。情けない。あたし今までなにしてきたのかしらと思った。みんな、あたしの様なメッキじゃない、正信証明の純金。つくろいではなく、ほんもの。

まいって感じ。こんな人達の中から逃げたいって感じ。後へ向って走りだしたい感じ。でもあたし、今度は逃げない。今本当に足すくんでるけどほんのすこし休んだら、もうすこし落ちついたら、すこしずつ片づけるつもり。今ここで逃げたらこれだけの仲間捨てることになるもの。どんなことがあってもそれだけはできないもの。だからしょうないけど、歩きます。すこしでもキラ

キラできるようあるきます。

天 川 季美枝

ロータリークラブとはいったいどんなものか、ロータリーとは何なのかをさぐる意味でこのセミナーに参加した。ロータリーとは個人個人が社会の一員としてやるべきことをやっていくことではないかとなんとなく感じてきた。ロータリークラブとはクラブとして存在しているようなしていないような、しかし実存しているクラブではないかとも思えた。

毎日毎日すばらしい先生による講演は、とてもうれしかった。今まで他の研修会では経験できないことであった。が、スケジュールの面でそれぞれ時間的にゆとりは充分あり、私達を大人としてみとめてくれていたようだが、けじめ的なものがかけていたのではないか。たとえば、朝食はみんながそろってはじめるとか。

小さなところでキャンプファイヤーについて少し感じたことがある。時間的には一時間半と充分あったようだったが、スタンツにおわれてあわただしくおわったのではないか、みんなで「バカ」になって楽しむことが少なかったように思う。

1つここにきて頭の中で考えるようになったんですが、「奉仕」と「ボランティア」とはどうちがうか。また同じことなのか、同じことならなぜ2つのことばがあるのか、とても疑問を感じた。ボランティア活動ということばをよくここで耳にした。あえてこのことばをいわなくとも、私が今までやってきたことを考えてみると奉仕ということばが出てくる面もある。ボランティア、ボランティアといわなければ奉仕はできないだろうか。そんなことはないと思う。自分なりにひとりでも充分やっていけるものではないかと思う。

今の世の中人のためにということば自体なくなりかけているような気がする。でも誰でもが心の中にもっているものではないだろうか。はずかしがらず、ささやかでもいい、これからがんばっていける自分自身に自信みたいなものが生まれてきたように思う。このライラセミナーにいかないかと声をかけてくれた

ロータリアンに感謝している。ありがとうございました。

第3回RYLAセミナー感想文

多田好美

四国地区、兵庫地区の各ロータリー 推せんにより集まってきた方たちと3日に始めて会いました。

人と出会うことがどんなにすばらしいことか分りました。

大学生でボランティア活動している方、学校先生、働いている方、いろいろな方に会いました。夕食後キャビンタイムの時、自己紹介はかたくなりました。

3日から6日間の田中先生、増田先生、新野先生、3人の方の講演はとてもいいお話を聞かせていただきました。

「人間とは何か」というお話を聞いて、毎日生活にすこしでも、人の為に自分が出来る範囲です。

たくさんの人の目により、一つの事をする場合においても協力ということが大切わかりました。

この研修会に参加させていただいたということが、私にとってこれからの人生でプラスになれるように努力していくつもりです。

ロータリーの方、お世話をしていただいた方、そして研修生の方、ありがとうございました。

高橋美和

まず何よりもこのライラセミナーに参加させていただけた事に感謝したい。

大変熱のこもった講義をされた先生方、特に田中先生の講義では思わず涙が出たほどだった。その言葉一つ一つが全て身にしみる思いで、今までつい、いやな面には目をそむけていた自分、片肘を張っていた自分、等リーダーとしての心がまえ以前に、自分自身を認識していかなければいけないと考えさせられた。又、とかく感情や環境に影響されがちな私の活動を高く広い面から導いて下さった増田先生、新野先生、学校を卒業し、久しく講義から遠ざかっていた

私には一層その感激が大きかった。

そしてこのセミナーを意義有る物にしたのは、70名余りの受講生だと思う。それぞれの意見をフルに発言し合い、共鳴し、又反発し合い、貧欲に互いの考えを吸収した。皆、この活動にかける信念と、情熱で短期間でも腹をわって話せる団結が生れたのだろう。

しかし、このセミナーを感激した、だけで終らせてはいけない。ダットレーでの笑顔、レクチャーで集まった炎も一つ一つ分かれてしまえば、小さなものだと思う。それをいかにして、消さずに、長く明るくともらせるか、実践有るのみだ。

最後に、親身に私達の悩みを聞き、アドバイスして下さったカウンセラー並びにセンターの方々に心より感謝し、今後も御指導下さる様お願い致します。

奉仕とは、献身とは、を身を持って私達に示して下さいました今井ガバナー、その衝撃はあまりにも大きく、私の心を打ちました。又、深川ディーンも毎晩眠らずに働かれていたと聞きます。大きな犠牲の上で学んだ私達です。私もいつか誰かの心に火をともし事が出来れば幸せです。

C・Cグループ

Take it easy.
藤田

友達が甘言とボラテ了!
どうにもおもしろいお話を聞かされた。
上村美知

新しい友が
出来そう。別に
出て回国の誘いも
ない。バカな話ばかり!

ロケーターセミナー
おもしろい出来事
この出会い大切に
しています。香子の再会が
いい。

おもしろい世界の話
を聞きました。
おもしろい話
を聞きました。
おもしろい話
を聞きました。

若し人等に教えられる日のか
大変多かつた。皆さんありがとう。
料野齋 (神主)

未来の過去は今!
僕の心に焼付いた言葉は
みなさんありがとう。
新居英 尾崎雅紀

自然の中の美しい風景
山々... 水々... 緑々...

余島

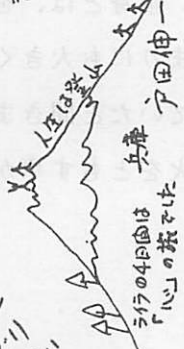


自然がいっぱいの島
で楽しいみんなと
一緒に暮らせた
ことはありません
加藤正伸

感謝の心!!
感謝の心!!
感謝の心!!

余島に暮らす人々の
生活は... 自然と調和
した生活です。

思い切った参加にみるか?
みんなと仲良く話そう。
おもしろい話があるよ。



Mr. Tada
宮浦伸一

晴天に恵まれた
4日。ヨット水泳
テニス。おもしろい話
がたくさんあった。
おもしろい話があった。
おもしろい話があった。

Again!
M. Yamaguchi

老体から参加して、人間関係、再認識、またこれから年を取らなければいけません。秋野雅子

「RYLAの“Y”は心の若さとも解釈したい」

カウンセラー 東 敬 三

何と申しましても、最初はやはり戸惑ったといったのが実感でした。同じ年頃の子供をもっている私としまして、家庭内では体裁も恰好もかまわないで、手前勝手に息子や娘に振舞っていたのですから、そりゃこれからの3泊4日の集団生活は、一体どうなるのやらと開講式の時には、いささか後悔めいた不安と心配も多分にありました。

他人様の育てられた青年男女のカウンセラーとして果して、何の指導力があるのやらと、今更ながら反省をせざるを得ませんでした。ところがどうでしょう、結果から先に報告しますと、私はこの若い人々を通じて得た尊い体験は、自分の子供に対する見方に変化がみられる程、良い面が自分に現れたような気がしています。若い人々の、自分の子供を含め、もっているあの良さ、知らなかった心のある部分を何となく感じとれるようにして頂いたのがRYLAセミナーではないでしょうか。

今もRYLAセミナーの何とも表現し難い心の温い雰囲気、それも格調高い指導性をもったリーダーシップトレーニングに酔っている気分です。余島といった特別の場所、非常にすぐれた講師の先生方にめぐまれ、それを併せ演出された企画のすばらしさに、自分の心が忘れていた何かをひき出してくれたのではないのでしょうか。

青少年の非行・暴力等が云々されている現代世相の中で、こんなにすばらしい、心の豊かな、おもいやりのある青年達がずいぶたくさんいることを知らせて頂き、希望と勇気を与えてくれたことも嬉しい感激の一つでした。これこそ未来へのいおきでなくて何でしょう。感謝したい気持はカウンセラーであった私の方ではなかったのでしょうか。

RYLAの“Y”のyouthは心の若さ、気高い感受性の豊かなおもいやりのある“Y”であると信じています。年令肉体に無関係の“Y”であってほしいものと思っています。

R Y L Aセミナーに参加されておられたロータリー先輩諸兄達のあの心のみずみずしさを、私自身が知り得たことも、有難度いことであったと、感謝しています。

R Y L AはR O L A (ROTARY OLD LEADERSHIP AWARD)にならないように、どんどん参加して頂きたいものです。

では、又いつか必ずR Y L Aセミナーでお目にかかりましょう。

ライラで出会った皆さんへ

林 真 紀

今、思いかえしますと一瞬一瞬が大切な出会いであったライラも心の中に深くしずんで私を力づけてくれているように思えます。増田先生は立派なおとな、モデルになるようなおとなを探すのはむづかしいと言われましたが、ライラを支えて下さる先生方こそ、立派なおとな、モデルにすべきおとなだと思います。おとなのスタートラインに立っている若い人々に暖かく手を差し伸べ、力強く励まして下さる先生方にめぐり合えたこと皆さんにとって何よりの幸せだったのではないかと思います。出会った多勢の仲間と共に精一杯青年期を生き抜き立派なおとなになれることを願ってやみません。

ライラのすばらしい思い出は余島のすばらしさの中でより深い思い出となって心にのこることでしょう。ますますのご活躍祈って居ります。皆さんお元気で！

ライラセミナーに参加して

片 山 毅

つねに前向きで歩んでいる人との出会いには、いつもすばらしい感動がある。そこには、年齢を越えた何かがある。自分では若いつもりでいたが、ボランティア活動のリーダー達の、心に触れた時、何とも言えない気分になった。すばらしいロータリアンに包まれた、セミナー、今まで味わったことのない、感動がありました。このセミナーをいつまでも続けて下さい。

夏の阿波路は素晴らしいです。徳島へ来る時には、ぜひ連絡下さい。ライラの友情を持って心より歓迎いたします。明日会える事を楽しみに待っています。ありがとうございます。

第3回ライラセミナーに参加して

住谷幸伸

4/3余島におりたって感じたことは『なんて素晴らしい島だろう。』ということです。同じ香川県に住みながら、こんなに施設のとのったうえ、自然の残っているところがあることを知りませんでした。ロータリークラブ、ライラセミナー、YMCA、内容のまったくわからない言葉が飛び込んで来ました。今まで青少年活動はスポーツ少年団一つに打込んで来た私にとって他団体の活動を理解できたということは、これからの活動に大変有益であったと思います。それと同時に各種団体間の横のつながりも大切にしていかなければならないと感じています。

3回にわたって行なわれたレクチャーは、私が今まで経験したものと違って1つ大きな目を見た青少年指導者というものがどういうものであるかを教えてくれた様に思います。実際の活動の現場で働らく私にとってすぐに役立つものではなかったかもしれませんが、これからの長い活動においてきっと役立つのではないかと思います。参加者の中では決して若くない私でしたが、5、6年前の活力をまたとりもどしたようにも思われます。年令も職業もまったくちがう指導者がわずか四日間という短いスケジュールの中でともに食事し、ともに学び、ともに語らい素晴らしい友を得たことは一生の財産として大切にしたいものだと思います。最後に、このセミナーを開くにあたって影ながらご尽力いただいたロータリークラブの方々、ガバナーの方々、また、カウンセラーの先生に敬意を表するとともに、御礼のことばとさせていただきたいと思えます。

宮 浦 伸 雄

ぼくは、この様なセミナーは2回目です。丹波篠山でもフロンティア大学というセミナーがありますが、いつも思う事は、より多くの人と付き合い、人と人との輪を広げていく事の大切さを、切実に思います。

このセミナーを終えて職場に帰っても、セミナーで学んだ事を生かしていきたいと思います。

ほんとにありがとうございました。

第3回ライラセミナーを終えて

井 上 明 彦

まず最初に、この様な機会を与えて下さったロータリーの方々に感謝しながら、このセミナーをふりかえってみたいと思います。

ロータリークラブとかボランティア活動について、私はマスコミからの情報のみのイメージしかなかったのです。ロータリークラブ=選ばれた人々のエリート集団!? ボランティア活動=純粋で善意にみちあふれた崇高な行為!? どちらも、ごく普通の人々ではとてもできないようなイメージがあったのです。でもこのセミナーの4日間でその実態(ほんの一部ですが)がわかり、その考え方や行動を教わり、今までの自分のイメージが大きくくずれ去りました。自分とは種類の違う人々だと思っていたのが、ごく身近に感じられてきたのです。いいかえれば自分自身の考えにまた1つ幅がでてきたのです。個性豊かないろいろな人たちとの出会い、語らい、教え……。

すばらしい先生、友人という私の財産がまた大きくなった事に再び感謝して、これからの自分の人生にその教えを生かしていきたいと思います。どうもありがとうございました。

第3回ロータリーライラセミナーに参加して

科 野 齋

今回、私は琴平ロータリークラブの推せんにより、このライラセミナーに参加するチャンスを得られました。しかし、ライラセミナーは、どのようなものなのか全く予備知識がないまゝに参加したため、大きな不安を抱いたまま、島に着いてしまいました。

その不安が、少しうすらいで来たのは、各グループに別れてのキャビンタイムに入ってからでした。Cグループ、26名が一人一人の自己紹介を行ない、さまざまな仕事に着いているユニークな新しい友人等に出会いました。

このユニークなライラ等と3泊4日のセミナーを受けることが出来た事が一番の成果であった様に思います。

このライラセミナー、私にとって大変すばらしい体験の連続でありました。

各大学の先生方のすばらしい講義、又今井鎮雄先生の心を洗れる思いのした話、キャンプファイヤーの小さい火の集まった、大きな輪、各キャビンのライラとの集い、等々……数えられない思い出ば、私の大きな土産物になりました。

最後に深川ディーン、各カウンセラーの先生方、余島野外活動センターの職員の皆様にご心よりお礼を申し上げます。

藤 田 清 彦

4日間の短い間に、色々な地域から来た多種多様な意見を毎日聞かされ、日ごろ地域社会ではないような意見もたくさんあり、たいへん勉強になりました。3日間連続であけがたまで、みんなと話し合うようなことも、ライラならではの特徴ではないかと思います。初めて出会った人たちばかりでしたが、すぐにみんながとけこみ、4日目には何年も前から知っているような、そんな感じになっていました。ただ、雨がふりつづいたために余島の自然と接する機会が少なかったのが残念に思います。

ライラセミナーの内容は最初に自分が考えていたものとはたいへん違ったも

のでしたが、プログラムはたいへん満足しています。また島の設備も、いままでに自分が使った施設よりたいへん使いやすいものでした。ライラセミナーにもう一回参加するチャンスがあれば、次はもっと活発に意見を出し合い議論したいと思います。

感 想

西 坂 武

たのしい仲間との語り合い、おもしろく、わかりやすく、ためになる先生方の講義など、プログラムやその内容については、感想としてのべるまでもなく、みんなもまったく同じ考えであろう。

とにかく楽しかった、とにかくおもしろかった、とてもためになった、よい経験をさせてもらった。

とくに特筆にあたることとして、「奉仕には多少の犠牲が必要である」という言葉を、身をもって証明することになってしまわれた先生のことである。なんというか、今まで奉仕について、なんとなく割り切れなかったものが、晴れてきた思いであります。

このセミナーを終えて、地域に帰ったときに、このライラセミナーで自分が得たものはなにか、と問われたときは、このことを自分が得た大きなものであったと（自信をもって）話そうと思いました。

第3回RYLAセミナーの終幕を迎えて

尾 崎 雅 紀

第3回RYLAセミナーの終幕を迎えた今、この4日間の楽しく有意義であった日々が思い出されます。

たった3日前に初めて会った私達が、もう数ヶ月、数年来の友の様に心開き話し合える、という関係になれたということは私にとって今までに経験のないことでした。そして人と人との出会いの大切さ、すばらしさを教えられました。又、プログラム後の語らいの中で、大人の世界の厳しさ、年上の人の人生観と

いうものを知りました。まだ成長過程にある私がこういうチャンスに廻り合えて大変幸運でした。ロータアクトクラブのリーダーとして、このRYLAで学んだことをクラブの運営に生をして行きたいと思います。

ただ残念なことは4日・5日と雨で、活動範囲が限られたことでした。もっと色々な事をやってみたかったです。

そして、できれば、又来たいです。皆さん、ためになるお話、ありがとう！

そして、再会を夢見て……。

Cグループ ばんざい!!

妹尾達樹

一体ライラとは何なのだろう？と疑問を持ちながら4日前に余島に上陸し、すべてのプログラムを消化し、今帰路につこうとしている。4日前と同じ服を着、同じ場所に立ち、同じように空気を吸って生きている事は外見上何ら変わらない。今このセミナーで何が得られたかと自分に問うが即答は帰ってこない……しかし、この行事に参加し得たことは今後必ずいつか、どこかで、多種多様な形態で表わされてくることと思う。

これは私が今後社会生活を行っていく上において人生での大きな貯蓄である!!。お世話下さいましたロータリアンの先生方をはじめ、余島の皆様、又各地よりお集まりになられた方々、ほんとうに有意義な時を過ごすことができました。ありがとうございました。この素晴らしいプログラム(ライラ)が今後いつまでも継続されますことと御発展をお祈り致します。

竹内章介

雨に濡れ、酒に酔い初対面が旧知の友となった4日間。

“感激あれ若人よ、感激無き人生は空虚なり”の「感激」を何年ぶりに味わい、単調になりがちな生活に流れていっている自分の目がさめ、明日からは絶対に入島時の自分とは違う自分になって生きていけると思います。このプログラム全て有意義であった上に夜10時からの貴重な時間が本当の意味で他を知り

自己を磨く瞬間の連続であったと考えます。

お世話いただいたロータリアンの方々と諸先生に深く感謝し島を離れます。

竹 中 正 知

レクチャーでは色々と具体的な話があった。がしかし、田中先生の話は大変ためになったけれど、やはり教師の立場での状況設定であったようで、もっと現場の声ってというかそういうふうなものを取り入れてもらっても、おもしろかったのではないかと思います。

レクリエーションの時間は、やはりやる前に施設の説明とかをやってほしかった。ただ「陶芸があります」などの一例だけではわかりにくいのもっと具体的に話してほしかったです。

それからファイヤーについて、おもしろいという点では最高のものだったかも知れないけど、proの面から見ると最低だったと思います。エールの進行のまずさ（つなぎの場面など）やスタンツの時間が2倍にも3倍にもなったということがやはり主な原因であったと思われます。1.5倍も時間のかかるなどということはリーダーのリーダーがするべきファイヤーではないはずです。

Disco Time では、みんな（ではないけど）が汗をながし踊ったということだけでも大きな意味があったと思います。

増田先生の講義ではユース・カルチャアということばがとくに大きかったと思います。自分がその時期にあるってということで、ツッパリの気持ちもわかるし、ってというようなことから本当に実感として感じられました。それから、「青年は自ら道を選んでゆかねばならない」という言葉、この言葉はほんとうに大きな意味をもった言葉だと思います。時の流れに流されがちな現代の青年にとってやはり、もう一度じっくり考えなおすべきものだと思います。

そして僕がいい時間だなと思ったのは思索の時間です。ふだん生きていてもこういうふう一人で考えてみる、それも、ゆっくりと、すばらしい自然の中で、というようにそろった条件は、今後も得がたい貴重なものだったと思います。

それからバズについて、全体的にみんなHow toものが多かったように思います。（自分たちも含めて）それに質問にしても、わかり切ったようなことをわかり切った人間が言っている、というようなつまらない、くだらないといえるようなものもあったように思われます。リーダー、リーダーのバズなのだからみんなくだらない質問に同協しないでもっと考えてとりくんでほしかったと思います。

このRYLA全体を見ていて、やはり、けじめの面で欠けているところが多すぎたと思います。いくら自由をということでも最低の条件は設定しなければいけなかったと思います。ファイアーにしても、そうだと思います。リーダーのリーダーならばそういうところは、わかっているはず、という考えからの発想かも知れませんが、やはり現実としてはすこしズレが出ていたようです。

そして何よりもRYLAの大きな収穫は、新しい人との出会い、というものだったと思います。リーダーとしてのなやみやプライベートのなやみなどをみんなでおつけ合い、語り合った、ということが僕自身、人間としての成長の糧を受けたようです。このRYLAの仲間から得た人生における糧はこれからの自分の生活、サークルの活動にも、プライベートな面にも、大きなものとして反映してゆくと思うし、自分の後輩たちにも伝えてやりたいと思います。そしてこの仲間たちのことは一生忘れないと思うし、忘れたくないと思います。できますれば自分なり自分の後輩なりを来年のRYLAへ送りたいので、よろしくお願いします。最後に、このRYLAで得たことを地域に帰って必ず実践してゆくことを誓って、結びとします。

乱筆御免

P.S 加古川市立未田公民館所属

ボランティア野外活動サークル「ズンガリクラブ」

子供（小・中学生）を対象として〔野外活動を通じ青少年の健全な育成とさらには住みよい地域社会づくりをめざす〕という目標をかかげ毎週2回（2時間ずつ）の例会活動での学習会などを中心として、日曜には（土曜も）キャンプ場整備のためのワークや各種行事などを行っています。年間を通じた活動をすることによって子供たちに順序をおって、段

階をふんだ指導を行っています。(Y M C A やボーイのものを自分たちなりに組みかえた方法で)

P.S II—ただ我々にすれば何万円もするようなキャンプは否定的であります。

実際に何万円も出せるのは中流よりも上の家庭、それもめぐまれた家庭の子供のみしか参加できないものなど…… という考えからです。

それにキャンプの視察をしてみて子供たちが何かしらひまそうだなって感じがしました。子供たちの自由さというのも pro の中の一つかもしれないけれど火のところでリーダーが燃やしていて、子供は横に立っていて薪をわたすだけという感じがみられたので Y M C A らしくないなって思いました。カウンセリングの分野では Y M C A は頂点にあると言われている現在、やはりこういうことは、おかしいのではないのでしょうか？ ヒョッ子の考えかも知れませんがもう一度大きくなりすぎた組織というのも、みつめなおしてもいいのではないのでしょうか……！

THE END

THE 3rd ローターライラセミナーを終えて

西 上 喜代松

3月の初 香住ロータリークラブから第3回ライラセミナーに参加してみないかと言われ、あまり気乗りしなかったのですが行ってみることにしましたが、この島に来て皆さんといっしょに生活して行くうちに、こんなすばらしいセミナーならもう一度参加したいと思いました。

セミナーに参加するまで自分なりにリーダーシップに関する考えを持っていたんですが、講師のかたの話しや5日の日に行われたバズセッションやフォーラムで皆さんと話し合い自分の考えが未熟だったことを知るとともに、リーダーがどうあるべきか道が開けてきたし皆さんの話しを聞きとても勉強になりました。又、このセミナーに参加し多くの人と出会い語り合うチャンスにめぐり合えたことは私の人生にとって、とてもすばらしいことだったと思っておりま

す。どうか皆さん、このセミナーをいつまでもつゞけて下さるように、お願い

するとともに1人でも多くの人を参加させてあげてください。

第3回ライラセミナーに参加して

山下 真 弘

ライラに参加するのは第1回に続き2回目である。第1回ライラに参加して非常に得るものが多くあり、今回も参加させてもらったが期待をうらぎらず、第1回とはまた違った収穫があった。

このライラに参加している人は、20才前後の人から、かなりの御年配の人までさまざまである。そして、その各人が、青少年指導のあり方について、あるいは自分の人生について自分なりの考えを持っている。その様なメンバーが、世代を超えて一つとなって議論しあえる会が他に存在するであろうか。

ライラセミナーは、我々に青少年指導に対する指標を与えてくれた。

ライラセミナーは、我々にすばらしい人との出会いを与えてくれた。

このすばらしい機会をどう生かすかは今後の課題であろう。絶対に無駄にはしたくない。

加 藤 正 伸

この余島にやってきて、あっという間に3日間が過ぎ、とうとう最後の日の朝がやってきました。美しい自然の中で愉快的仲間達と様々なことを話し合い笑い、そして酒を飲みあったことは僕にとって一生忘れることはできないでしょう。特にキャビン内において比較的齡下の僕には人生経験の豊富な他の人達との話しには、考えさせられるところが多く非常に良い勉強をさせてもらいました。今後はこの体験をどのように自分に活用し他の人に奉仕できるか。また、どれだけ多くの人にこのすばらしさを話せるか、努力するつもりです。

最後に、このすばらしい体験をさせて下さったライラセミナーの関係者に心からお礼を申し上げます。

第三回ロータリーライラセミナーに参加して

吉岡真紀

すばらしい自然・環境に恵まれて、そしてそれ以上にすばらしい仲間達とめぐり会えて、色々な思い出を胸に夜を徹して語り明かした仲間達との別れの時がやって来ました。最初は詳しい活動方針・活動内容もわからないまま、飛び込んで来た私だったけれど、今のこの充実感・友とのつながり、何ものにも代えられないものを得た気がします。

親睦を深めてくれたキャビン・タイム、キャンプファイヤー、ディスコ、日頃あまり機会のない討論会、そして身につまされ一つ一つうなずかずにはいられなかった実のある講演等、得るものの多いプログラムでした。特に田中国夫先生の青年の意識の分析や役割、心理学的観点からのアドバイスには共鳴するところが多かったと思います。

また、今まであまりよく知らなかった、奉仕という言葉では言い尽くせない本質的なロータリーの精神を少しでも知ることができてよかったと思っています。そして今井先生のお話のアーネスト・ゴードン著作の包帯を洗った兵隊、私達一人一人のともす火はたとえ小さくても集まれば明るく照らすことができるし、ファイヤーストームを組み立てている薪一つがくずれても火は消える、灰という何らかの犠牲を払っての奉仕で私たちのこれからの生き方の指針を考えさせられました。これらのことがいつ私たちの血肉になるか、どういう形で表われてくるかわからないけれど、今すぐでなくても、いつか何らかの形で役立てたいと思っています。このセミナーで火をともした親睦の輪を絶やさないことを願っています。

このようなセミナーに参加する機会を与えて下さったロータリークラブに心から感謝しながら余島を後にしたいと思います。

第3回 ライラセミナーに参加して

矢野 加代子

ブラボー！ 人間達よ！

この三泊四日のセミナーの間、人間讃歌のファンファーレの鳴りっぱなし。そして“自由”という不可解な二字の何と厳しかったことか。人の鼻はただひたすら息を吸い、吐くためにあり、人の口はただひたすら語るためにあるのですネ。口を開けてしゃべることによって素晴らしい出会いが出来、そして深まり、口を閉じて目をつむった時、心の中に静かり降りて拡がっていく。この作業の心地良さを、何年も、本当に何年も忘れていました。それと共に気軽に口に出していた「自由」ということばの重さ、厳しさをこんなに思い知らされたことは、今だかつてありませんでした。「自由」には「責任」がついてまわります。頭では理解できている、何でもないことでしたが、この「責任に裏打された自由」の何と厳しいことか。むつかしいのでなく、厳しいのです。三泊四日のプログラムをしっかりと消化し、受け止めてこそいただける「自由」だったと思います。このセミナーでの成果。何年か先に、又何十年か先に、後に続く世代の人に伝わって行って、根を下ろしていることを希望し、否、信じて疑わない者です。 感謝。

岡本 尚実

昨年に引き続き2年目の参加でした。なにせ野外活動の経験などほとんどない私は、昨年は、ただ、まごまごと、スケジュールにのっていきことだけに精いっぱい、そこで自分を開き、生かし仲間との輪をつくるということが、ひょろろに不十分で、帰島後、長く馴れ親しんだ友人、環境の中でしか自分を表現できない自分をしたたかおもいしらされたのでした。

再び余島を訪れることができ、今年は、セミナーの間、とにかく私なりに何を今一番感じ、何を一番したいか、何を仲間と語り合いたいか、そして1つでも多くのことを吸収するために、能動的に3泊4日の1日、1日を（自己満

足かもしれませんが、昨年とは大きくちがって) 充実した日々を送れた気持ちでいっぱいです。

3日間の先生方の講義も、すべての選択を前にこれから自分の進むべき道を、あらゆる自分の生き方を模索している私にとってはひじょうに重要な示さを含んだものでした。

余島での人の輪の灯を私もいつまでも心にともしつづけてゆきたいと思いません。

第3回ライラセミナーに参加して

札場 幸余

ここに来て、一番初めに思ったことは、「すごく恵まれた何もかもがそろっている施設」でありました。風景よし、設備よし、人もいい、たまにカラスが鳴いているのもいい。

リーダーの研修だから実践的なことが多いのかと思っていましたが、大勢の仲間と共同生活しながら、学びたいところ、いいところを吸収していくこれが私にとってすごくむずかしかったと思えました。でも私も一人リーダーなのでした。たくさん、この頭に、このノートに残っています。

私は自由な時間を正直言って休息にも使いました。今思えば、他に交流の少なかった人達と話をすればよかった。でもなかなか思う様に言えない。これが私にとってリーダーとしての研修だったんですね。

年をとるたびに1つの集団に参加して、仲間がすばらしいいい考えを思っておられると思い、私が小さく見えます。でも私は私なりに頑張ってみます。リーダーの研修であり、人生の勉強でもありました。今度ここに来る時は、篠山からもっと大勢の人と来ます。いい研修でした。ありがとうございました。

ライラセミナーに参加して

北添 美佳

自由であるということはむずかしい事です。この4日間、すばらしい環境と、多くの友の中で、私たちはすべて自由であり、そして余裕のある時を過ごせた。

と同時に、なんと、このゆったりした時の流れが、信じられないほど、良い意味での緊張を与えてくれたことでしょう。それは私たちが大人として、成人として、そしてリーダーとして過ごすことを暗黙のうちに要求されたためだと私は考えます。それは私たちに自己を見直すことを教えてくれましたし、大人としての未熟さを反省させてくれるものでした。

この余島で私たちはリーダーとしてのあり方を学ぶために考え学んだのですが、同時に80人足らずの仲間で構成された集団の中で生活するという団体行動も行なったわけですが、その中には我々が今後指導しようとする者の立場にたち帰って、その立場を理解するという勉強も含まれていたように思います。時間厳守、他人に迷惑をかけない行動、翌日の自分の勉強を考えての前夜の態度、健康管理等に関しての配慮についても身をひきしめられるような思いで注意したものです。

また、このセミナーで実際的な技能指導を行なってほしいというような要望も出されていましたが、私はそれよりも、このセミナーは、友との語らいや自己の思索によって、自分が今後しなければならないこと、リーダーとしての自覚等を、結論は出ないとしても、必ず手さぐりをし始めるようになる要素があると思いますし、それがリーダーとなる段階で必要な勉強であると思うのです。

ともすれば井の中の蛙となりがちな私にとって、四国の他県の人たちや兵庫の人たちと交わり、語らい、さまざまな考え、悩みに触れそれを自己にふりかけ、考えることができたという点を大きな収穫として心に刻んで、余島を発てることに、どっしりとした充実感を感じています。

このセミナーを計画され、私たちを招いて下さった方々、その他お世話いただいた方々、本当にありがとうございました。

第3回ロータリーライラセミナーに参加して

近 沢 雅 子

今、私はとてもおいしいごちそうを食べ終えようとしている。

最初は、このごちそうがどんなものであるかわからないまま食べ始めたけれ

ど、次々と運び出されるメニューの豊富さ、充実さに感激しつつ、もう間もなくハシを置こうとしている。

正直な話、今まで社会福祉的活動にたずさわったこともなく、ただ日々、子供たちに英語を教えているだけの私で、このセミナーに参加した人々の様に、色々な面に活動をしている事を知ったことだけでも私にはプラスになった。もちろん講演を聞くことによって私のこれからにまた考え方に、プラスあるいは、再認識をさせるようしむけてくれるきっかけが得られた様に感じる。日頃、多勢の人々と討論さえない私には、キャンプファイヤーでの出し物を考えるミーティングでさえ良い経験となった。考えれば一日に起こった一つ一つの出来事、一人一人の言葉、全てする事のないものになりできることなら、形に残していつまでも机のひきだしの中にしまっておきたい様な気がする。

長い四泊五日だった。悪い意味の「長さ」でなく、一日に多くの事をし、経験できたことからくる長さであった。

食べ物を食べっぱなしでは、食べた意味がない。このセミナーを終え、得た事を私の身体の血とし肉としなければならない。

最後にこのセミナーを催すにあたっての関係者の方々に心からお礼を申し上げ、また、この様なセミナーをいつまでも続けて下さることをお願いいたします。

第三回ライラセミナーに参加して

上村美知

長いようで短かい、短かいようで長い余島での4日間が今終わろうとしている。ここでの生活は私の頭初の予想とはまったく違い、私にとって予想を大幅に上まわる意義深いものであった。

田中先生の「青少年理解」、増田先生の「社会と青少年」、新野先生の「国際理解」、どの講演も私にとって有意義なものばかりであった。

田中先生、増田先生の講演は特に、それぞれその前夜、グループでの話し合いの中で問題になっていた内容だけによりいっそう興味深く聞くことができた。

ライラセミナーに参加したからこそそのような講演を聞くことができたのだと思うと、これだけでセミナーに参加した意義があったと思う。四国の高知という文化交流の場の少ない辺境地に住んでいる者にとって、中央（あえて中央といいます）の先生方の講演を聞く機会というのはめったにないのである。そういう意味でまずこのセミナーを評価したい。

次に今井先生の書かれた碑にあるように「人と出会い、神と交わり、愛の火のもえる所」の言葉がまさに現実のものであったということである。私は余島で多くの人々と出会った。そして余島に到着するまでは予想もしなかった新しい友情を…… 24もの新しい友情を得ることができた。それぞれの人生の中でたった四日間の交差点。何年も何十年ものつき合い、そんな中から生まれたものではないけれど、私の人生にとってこの4日間は何年も何十年もの年月にひびきするといっても過言ではない。さまざまな環境の中からさまざまな人々が人間であるという共通点をもって集まり遊び議論し合った。この中から生まれた友情を今はまだかすかなものであるが大切に育てていかなければと思う。

最後に、今井先生が大きな犠牲を払って示してくださった私たちへの深い、深い思いやり、心にしっかり刻みつけておきます。また、深川ディーンはじめ他の先生方の思いやりにも感謝します。そして小さなローソクの火を少しずつでも広げていけるよう努力しなければ!!

できれば今井先生をはじめ、諸先生方に再会したいと思います。来年も参加したい …… けれど …… 他の人にも未知の人にも知ってもらわなければいけませんね。修了生にも再会機会を与えてください。

ありがとうございます。

生活の断片



オープニングパーティー



ギターに合わせて



雨の中の植樹



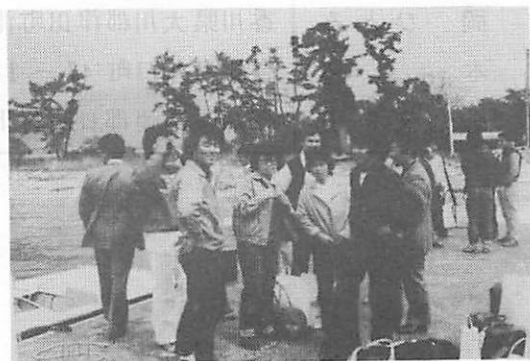
キャンプファイアー



スタンツ



もうお別れです



又逢う日まで

第3回 RYLAセミナー運営委員会

R. I 第 267 地区	ガバナー	近 藤 良 一 (高松南)
	直前ガバナー	中 島 源 (小松島)
	パストガバナー	梶 浦 暁 一 (松 山)
		鹿 庭 幸 男 (高松南)
		片 山 鹿ノ助 (小豆島)
		江 藤 一 明 (小松島)
		佐 藤 功 (高松南)
		吉 本 功 (高知東)
		米 倉 明 治 (小豆島)
R. I 第 268 地区	ガバナー	今 井 鎮 雄 (神戸西)
	パストガバナー	執 行 孝 胤 (西 宮)
	R Y L A 委員	深 川 純 一 (伊 丹)
		高 木 正 徳 (神戸垂水)
		山 村 徳太郎 (西 宮)
		森 五 彦 (神戸東灘)
		美 田 和 茂 (")
		西 田 進 次 (西 宮)
カウンセラー		江 藤 一 明 (小松島)
		琴 陵 容 世 (琴 平)
		藤 士 圭 三
		東 敬 三 (神戸東灘)
		前 田 和 穂 (神戸垂水)
		稲 鍵 雄 康 (西 宮)
		嘉 納 洋 (神戸東)
		林 真 紀 (神戸垂水)
事務局		渡 辺 圭 子 (ガバナー事務所)
		京 極 美 栄子 (神戸西事務局)

あ　と　が　き

第3回RYLAセミナー

Dean 深川 純 一

第3回RYLAセミナー報告書をお届け致します。

顧みまして、今回は雨に降り込められたRYLAでありました。殊に2日目のレクリエーションタイムやキャンプファイヤーが雨であったことは、誠に人気の毒でありました。しかし、リーダーの心をもった人達の集いです。雨なら雨で、それを是とし、自分に与えられた状況のもとでベストを尽す。即ち、出来る限りのレクリエーションを楽しまれたことと思います。キャンプファイヤーも、高木先生の御指導のもとに、室内で立波に焚くことができました。

雨のRYLAとはいえ、一面今回のセミナーは、一種スマートな感じでありました。何事もSmart、Smile、Speedに出来ればと思います。また、人それぞれの能力や感受性に依じて、このRYLAから何がしかのものを得ていただければと思います。私自身、毎年のことながら、今井先生や執行先生の偉大なリーダーシップをはじめ色々のことを学ぶことができたことを感謝しています。そして、このRYLAには、一般の青少年団体の指導者養成セミナーとは違った何かがあると感じていただければ幸であります。

ところで、昨年第2回RYLA報告書の「あとがき」において紹介致しましたが、第1回RYLA修了者松浦龍司君達が核となって、今年再び去る9月18日から4日間の日程で「丹波青年フロンティア大学」（篠山R・C、柏原R・C後援）が開催されました。これは地域のRYLAともいふべきものであって、地域社会における約50名の青年男女によって構成されたこのような素晴らしいセミナーが、このロータリーのRYLAと共に育って行くということは、地域社会にとって大変喜ばしいことであり、且つ、非常に大切なことと思うのであります。このフロンティア大学セミナーの今後益々の発展を祈ってやみません。

このRYLAも来年は第4回であります。3月19日から4日間、やはり余島において開催されることに決まりました。地域の皆さん、お誘い合わせ御参加

下さい。お待ちしております。

末筆乍ら、御多忙の中を文字通り寸暇をさいて遥々余島まで講議に来て下さった大学教授の先生達、そして、毎夜受講生達と寝食を共にして語り明かして下さいだったカウンセラーの人達の愛情と献身に深甚の敬意と感謝を捧げる次第であります。そしてまた、このRYLAを遥々訪れて下さいました近藤ガバナー、梶浦パストガバナーはじめ四国、兵庫のロータリアンの皆様、更には、この報告書発刊に当り、懇切な御指導を賜りました今井先生他RYLA委員の皆様方、テープ起しや原稿作成等面至りな仕事を気持よく引受けて下さったカウンセラーの皆様方、原稿を寄稿下さった講師の先生方はじめRYLA参加の皆様方、本当に有難うございました。そして最後に、RYLA実施並びに報告書発刊について、今や「この人なくしてRYLAなし」の感がある神戸西R・Cの京極美栄子さんの偉大なる陰の力に心からなる感謝を捧げてこのペンを擱きます。

以上



昭和56年4月3日～6日

主 催 R.I第267地区
R.I第268地区

RYLA運営委員会

開催地 西日本青少年野外活動センター
(神戸YMCA余島センター)

